



利
388
3

古言譯通

夏

ホ 2
389
3



和
388
B



ホ 2
388
3

か部	初丁
き部	二十八丁
く部	三十一丁
け部	三十六丁
こ部	四十四丁
さ部	五十九丁
し部	七十二丁
す部	八十八丁
せ部	九十三丁
そ部	九十五丁

古言譯通夏 目次

かゝふ ツブレ

五卷三十二、綿毛奈伎布可多衣乃美留乃其等和氣佐
我禮流可カ布能尾肩尔打懸云カとある可カ布ハ俗ハ
云ツブレのことなるべし。字鏡ハ際残帛也也不禮加カ不
とあり。袖中抄ハ。秋風ハほころびぬらハ藤ハをハまハつハり
させてふきりくすハ。顯昭云ハ。つハりハさせてふきりくす
なくとハ。世俗ハ。きりくすハ。つハりハさせてふきりくす
となくといへり。かゝはハ。きぬ布ハのやれて。何ハもすべ
くもなきを云ハなり。それらハをわらうつ作るハ。よくハへてつ
くりハ。これハ。つハよハきハなり。かゝハ。をわらうつと云ハ。又足など物

は觸ハきりハとるハ。其ハさいハいでハのハをハ繩ハのやうハよハなハひハて。
火ハを付ハて其ハ疵ハをハあハとハ。むハるハをハバハ。かハはハ火ハといハふハなりと
あるハせり。可カ布ハをハ後ハまハかハはハとハ云ハるハなるハべし。

かゞみ テホン

十六九二、古部ノ之ノ賢人ノ藻後ノ之ノ世ノ之ノ堅監將ノ為迹ノ老人ノ矣ノ送
為車持ノ還來ノ廿卷五十一。宇美ノ乃ノ古能ノ伊夜都ノ藝都ノ岐尔ノ美
流比等ノ乃ノ可多里都ノ藝豆ノ氏ノ伎久比等ノ能ノ可我美尔ノ世武乎
安多良之伎ノ吉用伎曾ノ乃名曾ノ云ハ。などある可我美ハ俗
まハテホンハといハふハ。同ハトハ。曾ハ。云ハ。などある可我美ハ俗
かゞはハカウバシハ。

廿卷^{六十}ノ宇梅能波奈香乎加具波之美等保家杼母己^コ
許呂母之努尔伎美乎之曾於毛布とあるハ香ガカウバ^シ
シイ故ニの意あり。

かくカヤウカウ

一卷^{十一}ノ神代從如此爾有良之とあるハカヤウニア
ルソウナともカウアルソウナともいふ意なり。いづく
もあるも同ト意なり。

かくクコトガクコトハクヤウハクコトヨ

四卷^{廿二}ノ梓弓爪引夜音之遠音爾毛君之御事乎聞之好^{ヨシ}
毛十卷^{四十}ノ暮不去河蝦鳴成三和河之清瀨音乎聞師^シ

吉毛^{ヨシモ}などあるハキクコトガといふ意なり。十六^{三十}ノ
佐男鹿^{サヲシカ}乃來立歎久頓爾吾可死云とあるハナゲクコ
トハ或ハナゲクヤウハと云意なり。又人之歎可久とや
りよ結めとるハナゲクコトヨと云意なること。念晚久^{オモヒムシク}
と結めとるハクラスコトヨ余戀居久と結めとるハヲ
ルコトヨと云意なるよ相准べし。

かくのクコトガクコトガルコトガ

聞久乃^{ミカクノ}嘆可久乃とやうよ云るハキクコトガナゲクコ
トガといふ意なること。見卷之欲戀良久乃多寸など云
ハミンコトガコフルコトガといふ意なるよ相准べし。

かくは クコトハ ルコトハ

聞久波 嘆可久波とやうに云るハ、キクコトハ、ナゲクコトハと云意なること。吾戀良久波と云ハ、コフルコトハと云意なるに相准べし。

かくを クコトラ

嘆可久乎云くとやうに云るハ、ナゲクコトラといふ意なること。行卷乎欲と云ハ、ユカンコトラと云意なるに相准べし。

かくに クコトヂヤニ

人之聞久尔とやうに云るハ、キクコトヂヤニといふ意

かげども ヒオモテ

一卷 二十丁 名細吉野乃山者 影友乃大御門從雲居尔曾遠久有家留云く、これハ吉野ハ南の御門に當れる故に、かく云る。成務天皇紀に、山陽曰影面山陰曰背面とあり。

なること、人之見國と云ハ、ミンコトヂヤニといふ意なるに相准べし。即古今集に、それをたよ思ふこととて吾

やどを見きとれいひそ人のきうくみとあり。をべて、かく、けく、さく、なく、はく、まく、らく、など、の類、みな同格に用

く辭にて、譯言も大抵それさま似ることなり。なほ各其條を考合て、准知べきなり。

影面ハ、俗云日オモテ、背面ハ、俗云日ウラよて、狭くハ一家の境よても云、廣くハ天下よても云るなり。

かゝこき オソレオホイ 慮外ガマシイ

二卷 三十丁、挂文、忌之伎鴨言久母、綾尔畏伎とあるハ、オソレオホイ、或ハ慮外ガマシイと云意なり、集中よ多き詞あり。

かゝさる 正座ヲヨケル

十八 三十丁、波之吉餘之、都麻乃美許登能許、呂毛泥乃、和可禮之等、吉欲、奴婆玉乃、夜床加多古里、安佐祢我美、可伎母氣頭良受、云云、古ハ左字とあるハ、正座ヲヨケルと云

意よて、其夫の出去しあとよて、妻が夫の卧べき床の正中を避て、片方およりて卧を云ことよて、その夫を恭ひてもるにさなり、十三、夜床片去とあるも同、四卷、十三丁、幾許、思異目鴨、敷細之、枕片去、夢所見來之とあるも、夫の卧べき床の正中を避て、片方枕して寝るを、枕片去とい云るなり、さてこの歌ハ、枕片去て寝る夜の夢よ見え來しといふ謂るるを、かく云るあり、かくて此より轉て、必夫婦の間ならでも、此方よりさきの人を恭ひて、座を譲るを、片去といへ、源氏物語若菜よ、あまよ物と給ふやうなれど、いづれとも皆とあとの御けむひよ

を片去むらるさまよて過しとまへばこそ。ことなく
なだらけのよもあれとあるも。紫上を恭ひとるさまなり。
異本枕冊子よ。つちのそこよいりて。うやまひきこそ。
一家の子きむとち。殿上などよて。ハけしきむありこそ。
うちらしこまりか。とさりきこゆれとあるか。とさりも
同く。又同冊子流布本よ。山ハ云く。か。とさり山こそ。誰よ
所たきけるよ。とを。けきとあるも。片方よ避て。正
座を明置よ。の山名なり。と云な。とり。さて西行の撰
集抄よ。よろづの罪をも。此志のつよか。とさりて。草隠れ
なき跡までも。我をそむむるあざるあれとなり。とある

も。貴き志のつよけたされて。萬の罪の他所よ立除てと
云意よて。尊者小座を譲ることよ多とへて云るなり。熱
田大神縁起。日本武尊御歌よ。阿由知何多。比加彌阿祢古
波和例許牟止。と許佐留良牟也。阿波禮阿祢古乎とある
も。床避よて。夫君の床を避て。片方の床よ卧よしなり。
か。とふ。ダマシテトル。スカシテトル。云意よ。とある
十八。可多於毛比遠。宇萬尔布都麻尔。於保世母天。
故事部尔夜良波比登加多波牟可母とあるハ。ワが片思
ヲ太馬ニ負持セテ。越邊ニ遣。夕夕ハアレド。ソウセバ。モ
シ道中デ人が見テ。チヨット此方ニ見セテ。夕モレナド

三卷 十二 不聽跡雖云強流志斐能我強語此者不聞而
朕戀尔家里又不聽雖謂話禮話禮常詔許曾志斐伊波奏
強語登言などある語ハハナスあるハハナシラスルと
いふ意なり○四卷 四十 足引之山橘乃色丹出而語言
繼而相事毛將有言ハ者の誤とあるハクドイタラバの
意なり

かこらふ ハナシアウ ハナシヲシアウ アノ、モノ、イフ

サウダンスル 色ゴトノヤクソクスル

五卷 十八 伊都斯可母京師乎美武等意母比都迦多
良比袁禮騰意乃何身志伊多波斯計禮婆云とあるハ

ハナシアウテヲレド或ハハナシヲシアウテヲレドの
意なり又ハアノ、モノ、イフテヲレドとも譯すべし
廿卷 四十 爾保杼里乃於吉奈我河波半多延奴等母伎
美尔可多良武己等都奇米也母十一 十七 吾戀之事毛
語名草目六君之使乎待八金手六などあるも同ト又
人事乎繁跡君乎鶉鳴人之古家尔相語而遣都とある
之ソウダンシテと云意も聞えたり九卷 十八 海若神
之女尔邈尔伊許藝越相詛良比言成之賀婆云と十三
丁 左丹漆之小舟毛鴨玉纏之小楸毛鴨榜渡乍毛相語
妻遠などあるも同ト或ハ色ゴトノヤクソクスルとも

譯をべし。

かとりさけ イヒハナシ

十九 十一 二 京師乎母。此間毛於夜自等。心尔波。念毛能可
良語左氣見左久流人眼之等。於毛比志繁云とあるハ。
俗よイヒハナシといふ意あり。

かさらひぐさ ハナシノ夕子

十七 十四 二 余呂豆餘能可多良比具佐等。伊末太見奴比
等尔母都氣牟云とあるハ。ハナシノ夕子といふ意な
り。
かこくな アホウ ブテウハフ

九卷 十八 二 世間之愚人之。吾妹兒尔告而語久云とあ
るハ。アホウナ人がといふ意あり。或ハブテウハフナ人
とも譯をべし。

かぢつくめ 楫ヲ船ノツクニハメ

廿卷 十九 二 保利江己具伊豆手乃船乃可治都久米於等
之婆多知奴美乎波也美加母とあるハ。楫ヲ船ノツクニ
ハメといふ意よきこゆ。船のつくよ合をるを。都久武流
と云るなるべし。楫を船のつくよ合せて。彼方此方へ引
り。ごをよきと合て。ぎしくと音の數くよ立よしな
り。

かつて ユメニモ 一向 カタカラ ミゲンモ

四卷^{四十}娘^子部^四咲^澤二^生流^花勝^見都^毛不知^戀裳^摺可^聞とあるハ今マデハ夢ニモシラザツタジユツナ

イ戀ヲモスル事哉と云意あり七卷^三常^者曾^不念^物乎^{十二}繩^乘乃^名者^曾不^告などあるみれ同ト十

卷^{十九}木^高者^曾木^不殖^とあるハ一向^木ヲ殖^{マイ}との意なり十三^四戀^云物^者都^不止^來とあるも同ト

十六^{十三}吾^待之^代者^曾無^古事^記ハ火^遠理^命以^海佐^知釣^魚都^不得^一魚^{日本}紀^皇極^天皇^卷二^都續^紀廿^七詔^ハ

此^乃世^間乃^位乎^波樂^求多^布事^波都^天無^ななどあるハ

ユメニモといふ意よも一向といふ意よも或ハカタカラ
ラ或ハミゲンモなど云意よもきこゆる所なり
かつソノ一方カラソノ一方デハヤ片一方カラ

三^卷五^十世^間之^常如此^耳跡^可都^知跡^痛情^者不^忍都^毛とあるハカヤウニバツカリハカナイモノヂヤトハ

常ニシツテアルケレドソノ一方カラ痛イ情ハといふ
意なり可^都知^跡ハ知^跡可^都となきあへて心得べし四

卷^{十二}安^蘇二^破且^者雖^知之^加須^我仁^默然^得不^在
者^とあるも雖^知且^者といふことよて同ト古今集よ

のれてハねどをへぶつと思へむやのつ見るがらふか

ねて戀しきとあるも、見ながらよいつと心得る例にて、
 マダカウシテ見テ居ナガラソノ一方カラハヤ別レテ
 イタヤウニ戀シウ思ハレルと云意なり。伊勢物語より
 きながら人をバエしもをれねばいつうらみつ。猶
 そ戀しきとあるも、うらみついつと心得る例にて、氣
 ニクハ又人ヂヤト恨ニオモヒナガラソノ一方カラヤ
 ツパリ戀シウ思ハレルワイと云意なり。又古今集序より
 うつ八人のみよねそ思いつハ歌の心よをぢ思へど。
 又同集より、咲と見し間よいつ散よけり。又山の錦のたれ
 むのつちるなど、言をたきあへてきあぬも多しハヤ片

一方カラソノ一方デなども譯をべし。また、
 かつぐ　ハツク　ハツク
 四卷_丁四十は、玉主爾珠者授而勝且毛枕與吾者率二將宿
 とあるハ、ハツクといふ意なり。本居氏加都加都ハ、事の
 未慥ならんをつくるをいふ辭なり。假令バ且見ゆ
 とハ、未さだによ見えぬをつくよ見え初るを云。其ハ慥
 又見ゆると未見えざるとの中間なる故也。且見え且未
 見えすと云意にて、且と重ね云なるべし。此歌ハ、勝且
 を玉主_{タケモリニ}の上へ移して見べし。こそ且も玉主_{タケモリ}よ玉を
 む授てと云るにて、未けりて授畢ぬるよハあらざ

れども先づつくよ授初とる意あり。此餘中昔の物語文
かどよも多る。皆同意なりと云也。

かづらく カヅラニスル

十卷九。百磯城大宮人之蔓有垂柳者。雖見不飽鴨とあ
るハ。蔓シテヲル。といふ意あり。

かてり ガテラ カタぐ

一卷三十。山邊乃御井乎見我氏利神風乃伊勢處女等。
相見鶴鴨とあるハ。見ガテラ。或ハ俗よ見カタぐと云よ
同ト意よて。我氏利ハ相兼る意の言なり。その相兼ると
そ。一事よまよ一事のそはるをいふことよて。御井を見

るの主よて。それよそはりて處女を見とるよしなり。或
説よ。かてりハ加ると云ことより出とる詞なりと云り。
さもあらむ七卷十八。吾舟者從奥莫離向舟片待香光
從浦榜將會十七十七。秋田乃穗牟伎見我氏利和我勢
古我布佐多乎里家流乎美奈敝之香物などあるみな同
ト。後よハこれを我氏良とのみいへり。集中よも十八七
。宇梅能波奈佐伎知流曾能尔和禮由加牟伎美我都可
比乎可多麻知我底良十九十三。吾妹子我可多見我氏
良等紅之八塩尔漆而於己勢多流服之欄毛云くなど見
え。古今集よ。花見おてらよ。又心見おてら。好忠集よ。ま

みおてらなどあり。

かて コラヘニクイ ニクイ

二卷^{丁十二} 玉匣^{タマコ}將見^{マサミ}圓山^{マツヤマ}乃^ノ狹名^{サナ}葛^カ佐不寐^{サハズ}者^ハ遂^マ尔^ル有勝^{アリカテ}

麻^マ之^シ目^メ四卷^{丁十四} 此^{コノ}月^{ツキ}期^キ呂^ロ毛^モ有勝^{アリカテ}益^{マシ}士^シ十一^{三十三} 戀^{コヒ}

乃^ノ增^{マセ}者^バ有勝^{アリカテ}申^{マシ}目^メなどある。有勝^{アリカテ}ハ在^{アリ}ニコラヘニクイと

の謂^{イハ}る^ル。四卷^{丁十四} 妹^{イモ}尔^ニ戀^{コヒ}乍^ツ宿^{イチカ}不勝^{カテ}家^ケ牟^ムとあるハ宿

ニクカツタデアラウとの謂^{イハ}る^ル。十四^{丁九} 須^ス宜^ギ可^カ提^テ尔^ニ

伊^イ伎^キ豆^ヅ久^ク伎^キ美^ミ乎^ハとあるハ行^ユ過^キニクウテの意^イなり。廿卷

丁^{廿二} 伊^イ泥^デ多^タ知^チ加^カ氏^シ尔^ニとあるハ出^デ立^リニクウテの意^イなり

り。又^又三^三十^十和^ワ可^カ礼^レ加^カ豆^ヅ尔^ニ等^ト比^ヒ伎^キ等^ト騰^ト米^メとあるハ別^レニ

クウテの意なり。日本紀崇神天皇卷歌多誤辨珥固佐
麼^バ固^コ辨^シ介^カ底^テ務^ム介^カ茂^モとあるハ越^クニクカラウカの意なり。

餘^ヨハ此^{コノ}等^ト准^シへて知^シべし。又^又二卷^{丁十一} 知^シ勝^{カテ}奴^ヌ鴨^{カモ}又^又

入^イ不^カ勝^{カテ}鴨^{カモ}五卷^{丁十七} 比^ヒ等^ト國^{クニ}尔^ニ須^ス疑^ギ加^カ豆^ヅ奴^ヌ可^カ母^モ十四^{丁十四}

丁^{十二} 遊^ユ吉^キ須^ス宜^ギ可^カ提^テ奴^ヌ伊^イ毛^モ賀^ガ伊^イ敞^ハ乃^ノ安^ア多^タ里^リ十九^{丁廿三}

落^ル雪^{ユキ}之^ノ千^チ重^ヘ尔^ニ積^{ツメ}許^{コソ}曾^ソ我^{アレ}立^{タチ}可^カ豆^ヅ称^チ廿卷^{丁廿二} 道^{ミチ}乃^ノ長^{ナガ}道^チ波^ハ

由^ユ伎^キ加^カ豆^ヅ努^ヌ加^カ毛^モなどあるハ可^カ豆^ヅの反^ハ對^テよて加^カ豆^ヅ奴^ヌハ

コラヘニクカラヌ加^カ豆^ヅ称^チハコラヘニクカラ子^コといふ

よ聞^キゆれどもつらく思^{オモ}へバ奴^ヌ称^チハ不^フ字^ジの意^イよあらず

己^ミ成^セの奴^ヌよて鳥^{トリ}毛^モ來^キ鳴^{ナキ}奴^ヌなどいふ奴^ヌよ同^トトされバ知^シ

勝奴ハシリニクイ立加豆祢ハ立テ居ルニコラヘニク
 イの意なるよ其餘ハ准へて知べし志あるをこれらの
 奴を不字の意見よ見よるより今までの注者よくこの言
 を解得よる人一人もなきハおろそあよ見をぐよる
 の故なりさて有勝知勝など勝字を書よるハ勝のカツ
 の訓を轉用よるものなり宿不勝入不勝など書よるハ
 勝任也とあれバ不任と云意をとりよるなり又行難消
 難など難字を書よるハ難き意をとりよるなりさて又
 別不勝鶴ともかき可祢といふハ難字を常よ用ふるハ
 凡て可氏可祢可多久ハ皆其意通へるの故なりかく不

勝難ハ可豆可祢よ用よるハ勝字を可祢よ用よること
 なきハ勝ハ不勝の不字を省きよるよハあらでカツの
 訓を轉用よるの故なりよく考て辨ふべし
 かてマゼ
 十六十八 醬酢爾蒜都伎合而鯛願吾爾勿所見水葱乃
 煮物とあるハ蒜を搗合てと云なり加氏ハ俗よマゼル
 と云よ同ト和名抄よ唐韻云鈕雜飯也和名加之木加天
 とある加天も同ト推古天皇紀よ不知沈木以交薪燒於
 竈とも見えより
 かなしき カハイラシイ人

七卷丁廿四。佐伯山于花以之。哀我手駕取而者。花散鞞と
あるハ。カハイラシイ人かといふ意なり。十四丁九。爾保杼
里能。可豆思加和世乎。爾倍湏登毛。曾能可奈之伎乎。刀爾
多氏米也母。又丁十九。左奈都良能乎。可爾安波麻伎。可奈之
伎我古麻波多具等毛。和波素登毛波自。などある皆同し。

かなーら カナシゲ カナシソウ

四卷丁四十。常呼二跡。吾行莫國。小金門爾。物悲良爾。念有
之。吾兒乃刀自緒。云くとあるハ。契冲悲良ハカナシゲニ
なり。マビーらよ。こひーらよ。などいふとぶひなりと云
也。又俗よカナシソウニ。といふも同也。林田らなる

が小 ホドニ クラ井ニ

四卷三十一。吾屋戸之。暮陰草乃。白露之。消蟹本名。所念鴨
又三十一。道相而咲之。柄尔零雪乃。消者消香二。戀云吾妹。云
念の誤る などあるハ。消ウホドニの意なり。八卷三十一。
百枝刺於布流橋。玉爾貫五月乎。近美安要奴我爾。花咲爾
家里云く。十卷五十一。秋就者水草花乃。阿要奴蟹思跡不
知直爾不相在者。などあるハ。コボレルクラ井ニの意な
り。八卷三十一。秋田苳。借廬毛未壞者。鴈鳴寒霜毛置奴我
爾とあるハ。霜モ置ベキホドニの意なり。十卷五十一。音
之干蟹來喧響目とあるハ。聲ノカレルクラ井ニの意な

り十三^ハ。海處女等^{アヲトメドモ}。纓有^{ウツセリ}。領巾^{レモ}。文光蟹^{アルガニテ}。手二卷^{ニマケル}。流玉毛湯^{タマモユ}。
良羅^ラ。爾云^ニ。十四^{三十一}。武路^{ムロ}。我夜^{ガヤ}。乃都留^{ツル}。能都追^{ノツ}。美乃那^{ミノナ}。
利奴^{リヌ}。賀爾古^{ガニコ}。呂波^{ロハ}。伊敞^{イハ}。杼母^{シドモ}。伊末^{イマ}。太年^{タナ}。那久^{ナク}。尔^ニ。などあるも。
右^ミ。准^シ。へて知^ル。べし。

かよはカバ

六卷^{十八}。櫻皮^{カニハ}。纏^{マキ}。作流舟^{ツクリフネ}。二云^ニ。くとある。櫻皮^{カニハ}。ハ今云^{イマ}。カ
バ^バ。のことなり。

がねカタメ

三卷^{三十}。丈夫^{オスラフノ}。之弓^{ノユ}。上振^{アゴシ}。起射^{イッセル}。都流^{ツル}。矢乎^{ヤヲ}。後將^{ノチ}。見人^{ミム}。者語^{ハカタリ}。
繼金^{ツグガネ}とあるハ。語リツグガ^{カタメ}。の意なり。四卷^{二十}。佐^サ。

保河^{ホガハ}。乃涯^{ノシ}。之官能^{ノシカサノ}。小歷^{シバ}。木莫^ナ。刈^{カリ}。鳥在^{アリツ}。毛張^{モハル}。之來^{キタラ}。者立^{タチ}。隱^{カクレ}。金
とあるハ。立^{タチ}。カクル^{カタメ}。の意なり。そもこの我^ガ。祢^ネ。ハ。
十卷^{十四}。梅花^{ウメノハナ}。吾者^{ハチラ}。不令^{アラ}。落^{オシ}。青丹^{ニヨシ}。吉平^{ナラ}。城在^{ヒト}。人來^{キツ}。管見^{ミル}。之
根^ネ。と書^キ。とる字義^ジ。よて。云^ク。くせむ其^ミ。が根^ネ。本^ネ。といふ謂^{イハレ}。より
起^{タチ}。れる言^{コト}。よて。其^ミ。が為^ニ。といふ意^{イハレ}。よ言^{コト}。とるなり。中昔^{ナカノコト}。の詞^{コト}。
よ。后^{ノチ}。のね。坊^{ハチ}。のね。壻^{メカ}。のね。博士^{ハチシ}。のね。など云^ク。る我^ガ。祢^ネ。も同^{ナシ}。
く。后^{ノチ}。のね。ハ。后^{ノチ}。よ立^{タチ}。べき其^ミ。が根^ネ。ざ。ふるまひの謂^{イハレ}。よて。
其^ミ。餘^{ヨリ}。なるも准^シ。べし。五卷^{十三}。余^{ヨロ}。呂豆^{ロヂ}。余爾^{ヨニ}。伊比^{イヒ}。都具^{ツグ}。可^カ。
祢^ネ。等^ト。十卷^{二十}。橘^{ダイダイ}。之林^{ノハヤシ}。乎殖^{フウム}。霍公^{ホトギス}。鳥常^{ツチニ}。尔冬^{ニフユ}。及住^{スミ}。度金^{ワタルガネ}。又^カ。
三^{アサ}。丁^{ツユ}。朝露^{アサツユ}。爾^ニ。涼始^{ヒヨシ}。秋山^{アキヤマ}。爾鐘^{ニシガレ}。禮莫^{レナ}。零在^{アリ}。渡金^{ワタルガネ}。又^カ。
四^{アサ}。丁^{ツユ}。朝露^{アサツユ}。爾^ニ。涼始^{ヒヨシ}。秋山^{アキヤマ}。爾鐘^{ニシガレ}。禮莫^{レナ}。零在^{アリ}。渡金^{ワタルガネ}。又^カ。
七^{アサ}。丁^{ツユ}。朝露^{アサツユ}。爾^ニ。涼始^{ヒヨシ}。秋山^{アキヤマ}。爾鐘^{ニシガレ}。禮莫^{レナ}。零在^{アリ}。渡金^{ワタルガネ}。又^カ。

山田佃子不秀友繩谷延與守登知金又五十八丁秋都葉爾爾
寶敝流衣吾者不服於君奉者夜毛著金又一十六丁雪寒三咲
者不開梅花縱此來者然而毛有金十二丁四里人毛謂告
我祢縱咲也思戀而毛將死誰名將有哉十七丁四伊末
太見奴比等尔母都氣牟於登能未毛名能未母伎吉底登
母之夫流我祢十八丁廿四白玉乎都美底夜良那安夜
女具佐波奈多知婆奈爾安倍母奴久我祢十九丁十五丈
夫者名乎之立倍之後代爾聞繼人毛可多里都具我祢な
どあるみあ右よ准べし古事記仁徳天皇條女鳥王歌よ
多迦由久夜波夜夫佐和氣能美淤湏比賀泥日本紀顯宗

天皇卷よ美飲喫哉美飲喫哉此云千魔羅などあるも同
意なりそむく干我爾カルガニ光我爾テルガニ消我爾ケルガニなど云る我爾ガニと右
の我爾ガニとハ言の似とるのみこそあれよく味見れば用
へる様きをやうよ異ワカれること我爾ガニの條下よ引る歌と
もを照考て知べし志あるを本居氏の我爾ガニハ豫カチの意我
爾ニハ豫カチよの意なるを爾ニをつめて我爾ニといひとる
よてそのもと同言をと説て其趣詞瓊綸イヒも著ハせる
みよりてなべて世の古學者その説よ委チて強て心を費
さむものともせざめれど其をいまと考盡さば一て誤
てるものなりととへむ十卷丁廿音コエ之ノ干カルガニ蟹ナキ來ナキ喧響目と

あるハ聲ノカレルクラ井ニの意なるを。これを音の干ぬべき豫カての設カ又鳴と云意としてハ。ふさを一からぬことならずや。其餘ハこれカ又准へて知べきことなり。そのうへ我禰ガてふ言ハ。右カ又引ごとく古歌カ又あまカと見えされども。我禰ガ禰ニと云るハ。一もなくて。みカ我禰ガとのみ云り。も一我禰ガハ我禰ガ禰ニの切ならバ。我禰ガ禰ニと云るところもあるべきことなるをや。但し十四丁十九丁。於毛思路オモシロ伎野乎婆奈夜吉曾。布流久左尔。仁比久佐麻自利。於非波オホヒハ於布流我尔オホフルガニとあるのみ。ハヘルガタメの意ときこえされバ。必我禰ガ禰ニとあるべきことなれば。禰ガ禰ニを後カ又誤カて。

爾ニと作るものそと云べけれど。これハ東歌なれば。もとより我禰ガ禰ニと云べきを我禰ガ禰ニと云るなるべし。きてまカ古今集カ。櫻花散カひくもれ老らくの。來むと云なる道まカふ我禰ガ禰ニ。又泣淚雨カとふらなむ。又カり川水増りなバ。かへりくる我禰ガ禰ニ。又卷向の穴師の山の山人と。人も見ろ我禰ガ禰ニ。山カらつらせよ。拾遺集カ。山里カ志る人もカなむと。ときカに。鳴ぬと聞カバ。告カ來る我禰ガ禰ニなどある類ハ。ホドニ。或ハクラ井ニの意ときこえされバ。必我禰ガ禰ニと云べきことなるを。彼頃カ又至りてハ。既ハく訛カて。我禰ガ禰ニを我禰ガ禰ニと云カとるなるべし。

かね ホンモウラトゲズ コタヘラレズ ニクイ

一卷^{十七} 樂浪之^{サナミノ}思賀^{シガ}乃^ノ辛崎^{カラサキ}雖^モ幸有^{アレド}大宮人之^{オホミヤヒトノ}船^{フネ}麻知^{マチ}

兼津^{カチツ}とあるハ、當昔皇都デアツタ時ノヤウニ、全盛ナ世

ニ立モドツテ、大宮人ノ船ノ泊テ、ニギノシカラウコト

ヲ待クテ、辛崎ハ昔ノマ、ニ無難デアレドモ、ツヒニヨ

ウホンモウラトゲザツタとの意なり、古事記八千矛神

御歌、夜知^{ヤチ}富許能^{ホコノ}迦^カ微能^{ミノ}美許^{ミコ}登波^{トハ}夜斯^{ヤシ}麻久^{マク}爾都^{ニツ}麻^マ

岐^キ迦^カ泥^ニ氏^シ登^ト富^ホ登^ト富^ホ斯^シ故^コ志^シ能^ノ久^ク邇^ニ云^クとあるハ、八島

國ノ中テ、諸所方ク女房トスベキ女ヲタン子タケレド、

ツヒニ女房ニスベキ女ナク、ホンモウラトゲイデ、遠國

ノ越ヘテ、御出被成夕との意なり、これらハそのもと

心^{ココロ}ニ欲^{ホシ}ふこと、のつひニその本望を遂得ざるを云ハ、集

中^{ナカ}ニ多く^{オホク}不^カ得^チと書とるハ、あされり、四卷^{十五} 珠衣^{アキ}乃^ノ

狭^サ藍^キ左^サ謂^イ沉^シ家^ケ妹^{イモ}尔^ニ物^{モノ}不^ズ語^ズ來^キ而^テ思^{オモ}金^{カネ}津^ツ裳^モとあるハ、思ニ

コタヘラレズとの意なり、思ひらね妹がり行ハるど云

も、思ニコタヘラレイデの意なり、これらハそのもと心

ニ忍^シぶこと、のつひニ勝^タられざるを云ハ、集中^{シウチュウ}ニ多く^{オホク}不^カ

勝^チと書とるハ、あされり、勝^タ任^ニ也^トと字書^{ジショ}見^ミえとる如^カし、

十五^十 夜^ヤ麻^マ河^カ伯^{ハク}能^ノ伎^キ欲^{ヨク}吉^キ可^カ波^ハ世^セ尔^ニ安^ア蘇^ソ倍^ベ杼^シ母^モ奈^ナ良^ラ

能^ノ美^ミ夜^ヤ古^コ波^ハ和^ワ須^ス禮^レ可^カ祢^チ津^ツ母^モとあるハ、奈良ノ都ノコト

エ、忘レタレヤヨイニトハ思ヘドモ、ドウモ忘レニクイ
との意なり。吾心なぐさめおねつ更級や、姨捨山は照月
を見てといふ歌も、ナグサメニクイとの意なり。この歌
を大和物語も引て、なぐさめおとと釋するも其意な
り。忘れがときなぐさめがときなど云ハ、俗は忘レニク
イ、ナグサメニクイと云意なればなり。これらハ難と書
とるよあされり。金兼など書るハ皆借字なり。
かねて
六卷十九言卷毛湯敷有跡豫兼而知者云々二卷
丁よ。如是有刀。豫知勢婆大御船泊之登萬里人。標結麻思

乎十卷六十丁。足檜木乃山下風波。雖不吹。君無夕者。豫寒
毛などあるハ、マヘカドの意なり。按、豫字をカ子テと
訓るハ、豫をるのみなればことなす。兼字をカ子テと
訓ハ、豫をる意なると兼并する意なると二種あり。よく
考へてこの差別を辨べし。漢籍にて兼字ハ兼并をるこ
とよのみ用いて、豫をる意なるハ見あたらす。ととへむ
墨子兼愛など云ときハ、我身と天下とを兼并をる意な
るが如し。からぶみよてハ、いづくよあるも皆此定見
て通えと。志あるを此方よて可祢氏と云ハ、もとより
右の二種の差別ありて、混らむときが如し。其中今俗よ

も、豫をる意のことよのみいひなれて、兼并をる意よ云
るはなし、俗言よ兼カキくなど云も、マヘカドと云意よてい
ふが如し、又兼日、兼約、兼題など云も、マヘカドと云意よ
て云とるも、又もと兼并をる意よていひとるよもある
べけれど、今ハマヘカドと云意とのみ心得て、兼并をる
方よ云ることをバ、自ラは知人をくゑゑし、なち次條合考べ
し。

かね○かぬ カケアハセル

六卷四十二丁よ、八百萬ヤホヨロキチトセ年矣、兼而カチテ定家年、平城京師者、云く、
とある兼カチハ、カケアハセルと云意よて、今時ヨリ千年ノ

久シク後ヲカケアハセテ定メラレタデアラウといふ
意なり、から籍よ、周公兼夷狄と云も、本朝と夷狄との二
を兼并をる意よ云るよて同ト、十二十三丁よ、未玉之年、月
兼而カチ烏玉乃、夢尔所見、君之容儀者ハとあるハ、年ト月トヲ
カケアハセテといふ意なり、十四二十丁よ、安豆左由美、酒
惠尔多麻末吉、可久酒曾宿奈ナ、那里尔思シ於久乎可奴
加奴カヌとあるも、奥オクを兼カキくと云るよて、行サキノ極ヲカケ
アハセテの意よて、これも今と後とを兼并をる謂なり、
思兼神と申すも、天下萬事を兼并せて、思知ルよ一の名を
るよて同意なり。

かへり 夕チガヘリ

六卷一四丁。關無者セキナクバ還尔カヘリニ谷藻ダニモ打行而ウチユキテ妹手枕イモタマクラ卷手宿益乎テチマシヲ
十七廿二丁。近在者チカアラバ加弊利尔カヘリニ太仁母ニモ宇知由吉底ウチユキテ妹我多イモガタ
麻久良マクラ佐之サシ加倍底カヘテ祢天蒙チテモ許萬思乎コモシヲ多麻保己タマホコ乃路波之ノミチハシ
騰保久トホク關左セキサ閑尔ヘニ弊奈里底ヘナリテ安礼許曾アレコソ云々云々などあるハ、俗
よ夕チガヘリといふも同ト。

かへろさ カヘリシナ カヘリシダ

三卷五十丁。與妹來之イモトコシ敏馬能ミマメ崎乎サキヲ還左尔カヘリニ獨四見者ヒトリシミレバ涕具ナミダ
末之毛マシモ十五十丁。可敝カヘル流散尔ハルサニ伊母尔イモニ見勢武尔ミセムニ和多都美ワタツミ
乃於伎都ノオキツ白玉シラタマ比利比ヒリヒ互由賀奈ユユカナなどある 還左カヘリハ、還る時

といふと同トく。俗よカヘリシナといふこれなり。土
左の方言よてハカヘリシダといへ。又、關無の譯ハ

かへらま アレーヤコレヤ アチラコチラ
十一四十丁。加敝カヘラ良末尔ラマニ君社キミヤ吾尔ウレニ拷領巾之コウリョウキンノ白濱浪乃シラハマナミノ縁ヨル
時毛無トキモナキとあるハ、ワシガソナタヲ疎ウテ、ヨリツカマヤ
ウニオツシヤレドモ、サウデハナウテ、アチラコチラニ、
ソナタコソワシヲウトウテ、ヨリツク時ノナキナレと
の意る。又アレーヤコレヤとも譯をべし

かへ カヤ
十九十六丁。松柏乃マツカハノ佐賀延サカエ伊麻佐イマサ祢云ニイモくとある 柏ハ、俗

よいふカヤのことなり。

かほ ナリフリ

九卷^{十七}下。腰細之。須輕娘子之。其姿之端正尔。云くとある。姿ハナリフリといふも同ト。集中ハ姿兒容などの字

をかく訓也。日本紀も。容姿形容。容姿兒容。容止面兒顔。色姿色相兒などを皆然訓也。可保ハ一體の形様を總

て云なるを。容姿などの字。身體の長とあるものハ顔面なる故也。即可保といふを。顔面の形様を云ことこの如

くなれるなり。面兒などの字。志るれども。顔面の形様の

みを志る云こと。意得るハ末なり。本ハ一體のうへを

總云くを。後ハ漸顔面のみよ云こと。なれるなり。後拾遺集も。人志れずるをよハ袖を覆ひつゝ。泣むるりをぞなぐさめよとある類ハ。後のことなり。

かまけ カンシン

十六^九下。端寸八為。老夫之歌。丹大欲寸。九兒等哉。蚊間毛而將居とあるハ。カンシンシテヲラウ。と謂るるべし。

かみし 志らさむ 神様が證據ニ御立ナサレウ

四卷^{二十}下。不念乎。思常云者。大野有三笠杜之神。思知三とあるハ。三笠杜ノ神様が證據ニ御立ナサレウとの意なり。同卷^{四十}下。不念乎。思常云者。天地之神。祇毛知寒。邑

禮左變十二^カハ^ハ。不想乎^{オモハナ}。想常云者^{オモフトイハ}。真鳥住^{マコトリス}。卯名手^{ウナテ}乃杜^{ノモリ}之^ノ。神思^{カミシ}御知^{シラサム}。るどあるみれ同ト意るり。齊明天皇^{サイメイテンノウ}紀^キ。鰐田^{ウナタ}。蝦夷^{オムカ}恩荷^{オンカ}進而^{シテ}誓曰^{チカヘ}云^ク。若為^ニ官軍^{クワングン}以^テ儲^メ弓矢^{ユミヤ}。鰐田^{ウナタ}浦^{ウラ}神^{カミ}知^{シラサム}矣^{ナリ}とあるも同ト。

かみをこひのみ 神様ニ願立テ

廿卷^ニ五^イ十^ニ。和我^{ワガ}勢^セ故^コ之^シ。可^カ久^ク志^シ伎^キ許^コ散^サ婆^バ安^ア米^メ都^ツ知^チ乃^ノ可^カ未^ミ乎^フ許^コ比^ヒ能^ネ美^ミ奈^ナ我^ガ久^ク等^ト曾^ソ於^オ毛^モ布^フとあるハ。神様ニ願立

テといふお如し。

かむさぶ 神様メク トシヨル

神佐^{カミサ}夫^ブハ。神様^{カミサ}メクと云意^イなること。さ部^サさび^ビ條^{ジョウ}合^カ考^{コウ}ベ

四卷^ニ五^イ十^ニ。神左^{カミサ}夫^ブ跡^ト不^イ欲^ニ者^ハ不^{アラ}有^ズ。八^ハ多^タ也^ヤ。八^ハ多^タ如^カ是^ク

為^シ而^テ後^ニ。佐^サ夫^ブ之^シ家^ケ牟^ム可^カ毛^モとあるハ。年^{ネン}ニヨ^ヨツタ^トテ^イ

ヤト云^クデハナイとの意^イなり。七^シ卷^ニ三^{サン}十^{ジュウ}。木^キ綿^{ワタ}懸^ケ而^{シテ}祭^{マツル}三^{サン}

諸^{モロ}乃^ノ神^{カミ}佐^サ備^ビ而^{シテ}齋^{イム}尔^ニ波^ハ不^{アラ}在^ズ。人^{ヒト}目^メ多^{オホ}見^ミ許^コ増^{ゾウ}とあるも。ソナ

タが年^{ネン}ヨ^ヨツタ^トテ^イトウ^デハナイ。人^{ヒト}目^メシ^シゲウ^ウテ^ヨウ

アハヌニコソアレと云^クなり。

かむ カウ

將^{カガム}行^ムハ^イカウ。將^{カガム}鳴^ムハ^ナカウと云^ク意^イなり。將^{カガム}榜^ムるど云^クカ

ムも。コガウと云^ク意^イよて同ト。

かむ カナア

君^{キミ}爾^ニ戀^{コル}可^カ母^モなど云^カ可^カ母^モの可^カハ。後^ノ世^ノの哉^カよあされり。母^モを歎^ノ息^ノ辭^ヲよてアと云^カよあされり。されバ可^カ母^モハ。可^カとのみ云^カより委^シきなり。

かもかも トモカウモ ドウデモカウデモ サマぐ

六^{ロク}卷^{マキ} 三^{サン} 九^ク者^ノ左^サ毛^モ右^ウ毛^モ將^セ為^ム乎^ヲ恐^カ跡^ト振^{フリ}痛^{イタ}袖^{ソデ}乎^ヲ忍^シ而^{シテ}有^ル

香^カ聞^モ七^{シチ}卷^{マキ} 三^{サン} 事^{コト}痛^{イタ}者^ノ左^サ右^ウ將^セ為^ム乎^ヲ石^{イシ}代^ノ之^ノ野^ノ邊^ノ之^ノ下^ノ草^ノ

吾^{ワレ}之^ノ刈^カ而^{シテ}者^ノなどあるハ。トモカウモ。或^シハドウデモカウ

デモなどいふ意^イなり。八^{ハチ}卷^{マキ} 四^{ヨウ}十^{ジュウ} 此^{コノ}岳^ノ尔^ニ小^コ牡^{ウシ}鹿^カ履^{フミ}起^{オキ}宇^ウ

加^カ埜^ノ良^ラ比^ヒ可^カ聞^モ可^カ聞^モ為^ス良^ラ久^ク君^{キミ}故^{コト}尔^ニ許^{コソ}曾^ソとあるハ。サマぐ

と云^カ意^イなり。

かや フキクサ

四^{ヨウ}卷^{マキ} 五^ゴ十^{ジュウ} 黒^{クロ}木^キ取^{トリ}草^{カサ}毛^モ川^{カハ}作^{ツク}仕^シ目^メ利^リ勤^{キン}和^ワ氣^キ登^ト將^{ホム}譽^ム十^{ジュウ}方^{ホウ}

不在^{アラズ}日本^{ニッポン}紀^キ顯^{ケン}宗^{ソウ}天^{テン}皇^{オウ}室^{シツ}壽^ス御^ミ詞^ジ取^{トリ}菁^{セウ}草^{カサ}葉^{エフ}者^ノ此^{コノ}家^ケ長^{チヤウ}御^ミ

富^フ之^ノ餘^ユ也^{ナリ}延^{エン}喜^キ式^{シキ}大^{ダイ}殿^{テン}祭^{サイ}祝^{シユ}詞^ジ取^{トリ}菁^{セウ}計^{ケイ}留^{リウ}草^{カサ}乃^ハ噪^{ソウ}無^ム久^クな

どあり。此^{コノ}他^ノ集^{シツ}中^ノカヤと訓^{ツク}べき處^{トコロ}草^{カサ}字^ジを書^カること

多^{オホク}古^コ事^{コト}記^キ日本^{ニッポン}紀^キ等^{トウ}も草^{カサ}をカヤと訓^{ツク}ること多^{オホク}

見^ミえたり。其^{ソノ}ハみれ屋^ヤ菁^{セウ}料^{リョウ}就^{ツク}てカヤとい^ハへるよてフ

キクサといふよあされり。

からき

十七^{ジュウシチ}丁^{テイ} 須^ス麻^マ比^ヒ等^{トウ}乃^ハ海^{ウミ}邊^ヘ都^ツ祢^チ佐^サ良^ラ受^ウ夜^ヤ久^ク之^ノ保^ホ能^ノ可^カ

良吉戀乎母安禮波須流香物とある可良吉ハ、シンキナ、
又ハクニナル。或ハジユツナイ。或ハツライとも譯すべ
し。集中も多き詞あり。

からに ヂヤニ ニヨツテ

四卷 五 十 丁 よ 路遠不來常波知有物可良尔然曾將待君之
目乎保利とある。物可良尔ハ、モノカニニの意なり。廿卷
五 十 丁 よ 始春乃波都祢乃家布能多麻婆波伎手尔等流可
良尔由良久多麻能乎とあるハ、手ニ取ニヨツテの意なり。
からを カラツシヤル

七卷 二 十 丁 よ 住吉小田菊為子賤鴨無奴雖在妹御為私田
菊 カモ 私 ハ 秋 字 とあるハ、小田ヲカラツシヤル人と云る
リ。加良須ハ加留の伸也と云言よて、刈給ふと云意とな
る古言の例あり。

からとら キコク

十六 丁 十八 よ 枳棘原菊除倉將立屎遠麻禮擲造刀自とあ
る枳ハ、今俗ニ、枳穀の字音をもて、キコクと呼ものこれ
あり。

かりば カルバアヒ カリゴロ

十卷 三 十 丁 よ 秋田吾刈婆可能過去者云くとあるハ、カリ

ゴロの意よきこゆ。四卷^{十七}。秋田之穂田^ノ乃刈婆加^カ香^カ
縁相者^{ヨリ}彼所^ソ毛可^{モカ}人之^ノ吾乎^ワ事^{コト}將成^{ナリ}十六^{三十一}。茅草刈^チ草^カ
刈婆可^カ尔^ニ鷄乎^{ウツラフ}立毛^{タツモ}などあるハ。カル場合と云意よきこ
えさり。

かりて ベントウ

五卷^{二十}。都祢^{ツネ}斯良^{シラ}農道^{ヌミチ}乃長手^{ノナガテ}袁久^{ウラク}禮^レこ^ノ等^ト伊可^{イカ}尔^ニ
可^カ由^ユ迦^カ牟^ム可^カ利^リ豆^テ波^ハ奈^ナ斯^シ尔^ニとある可^カ利^リ豆^テハ糧^カのことよ
て。今俗のベントウの意なり。をもく可^カ利^リ豆^テハ可^カ禮^レ比^ヒ豆^テ
の縮^チでさるふり。和名抄は考聲切韻云糧行所賣米也。又
云儲食也。和名加天とあるごとく。後よ可^カ豆^テとの云い。

理^リを訛^シ畧^リとるるなり。さて可^カ禮^レ比^ヒハ乾^カ飯^イよて。旅^ノ飯^ヲを乾^カ
て賣^モありくなり。豆^テハ料^リよて。その可^カ禮^レ比^ヒよする料^リの米^コ
穀^コと云ことなり。酒^{サカ}代^テ沓^ツ代^テの代^テハあらば。さて今世^ノ
そあれ。往古^ノハ旅^ノ道^ノすむら價^ヲもて飯^ヲ買^フこともなく。と
を賣^ルる人もなけれバ。長^{ナガ}途^チを往來^ヲする人^ハ。可^カ禮^レ比^ヒよて
る料^リの米^コ穀^コを囊^ニよ入^レてもちあてきしなり。されどそハ
古^ノよ立^ツるへり。もとをわきまめていふときのことよ
こそあれ。歌^ノよ志^ヲあ委^メしきことをバひふべのらねバ。實^ニ
を乾^カ飯^イとのみ云も。乾^カ飯^イ料^リといふも同トことなり。さる
あらよこれ歌^ノよも。一云^ハ可^カ例^レ比^ヒ波^ハ奈^ナ之^シ尔^ニとあるせるな

アかくて其より轉アてハ必スも乾さる飯よをべき料
なるハさらよて乾さる飯ならでも旅よもちありきて
食ふを可互と云ことゝなれ、む。今のベントウよあ
れり。

かるトホグシウナル

三卷^{二十}下。佐保^{サホ}過^テ而^ナ寧樂^ノ乃^タ手^ケ向^ニ尔^オ置幣^ハ者^イ妹^モ乎^ラ目^メ不^カ離^レ。
相見^ミ漆跡^シ衣^ヅとあるハトホグシウナラズニアハシテタ
マハレトテゾの意なり。十二^十下。浦觸^{ウラフ}而^テ可^カ例^レ西^シ袖^ソ叫^ケ又
卷者^マ過^バ西^シ戀^シ也^ニ乱^レ今^イ可^カ聞^クとあるハ男女^オノ中^ノ絶^トテトホグ
シウナツタ袖^ス又思^ヒヒカヘシテ互^ニ纏^{アイ}タラバの意なり

○き部

き○けれ

一卷^{十一}下。高山^{カガ}波^ハ雲^ウ根^ネ火^ヒ雄^ユ男^オ志^シ等^ト耳^ミ梨^リ與^ト相^ア諍^ソ競^ケ伎^キと

あるハ相^アラソウタと云意なり。四卷^{二十}下。他^ヒ辞^ジ乎^ハ繁^ハ

言^コ痛^チ不^ア相^リ有^キ寸^コ心^コ在^ロ如^ゴ莫^ナ思^オ吾^モ背^セとあるハアハザツタと

云意なり。○寒^{サム}伎^キといふをサブイ痛^イ伎^キといふをイタイ

多^オ伎^ホをオホイ少^ス伎^シハスクナイと云意なり。氣^ケ禮^レも許^コ曾^ソ

のか、アの結^ヒの異なるのよて譯言ハ同ト。

き

三卷 四十 瀧上之淺野之雉開去歲立動良之云々八卷
 十九 春野尔安佐留鳩乃妻戀尔己我當乎人尔令知管
 十四 武藏野乃乎具奇我吉藝志多知和可礼伊尔之
 與比欲利世吕尔安波奈布與猶往くあり今世よハこれ
 をキジといへり

きこは オフセラル オツシヤル

四卷 三十 押照難波乃管乃根毛許吕尔君之聞四手年
 深長四云者云々十一 不知二五寸許瀬余名告奈
 十二 空言毛將相跡令聞戀之名種尔十三
 莫寢等母寸巨勢友廿卷 九 和我勢故之可久志伎許

散婆な布ありこれらみ形伎許湏ハのとまふと云こと
 よて今俗よオフセラル或ハオツシヤルなど云よ同ト
 古事記上卷沼河日賣歌阿夜尔那古斐伎許志下卷八
 田若郎女御歌意富岐美斯與斯登伎許佐婆日本紀仁
 徳天皇大御歌飲朋吕伽珥枳許瑳怒これらの伎許湏
 もみな同ト本居氏云伎許湏ハ人の言て我よ令聞意よ
 り云るるり然れども其言人を尊みて云ときならでハ
 ひとぬ言なり又中昔の物語文などよ申をと云べきを
 聞ゆと云ること常多しそれハ尊む人よ申ををのみ云
 べされバ古言の伎許湏とハつらひさま表裏のあひ

あり、今の人ハ、古言雅言のつらひざるを志らず、きこも
と、きこゆとをも一よこゝろえ、又人の己よむらひて言
ことをも、きこゆと云るど、いさくひがことあり。

きそ ヨンベ

二卷 二十 吾戀君曾伎賊乃夜夢所見鶴 十四 廿六 伎

曾母許余比毛などあるハ、ヨンベのことなり、伎曾乃夜

と云も、あが伎曾とのみ云も、同トことなり。

きはふ アラソフ

三卷 二十 兒等之家道差間遠鳥野干玉乃夜渡月尔競

敢六鴨とあるハ、月ノ入ヌサキニイタラウト急ゲドモ。

差間が遠ケレバ、月ノ早イニハ、ドウモアラソヒカツコ
トハヨウスマイカと云意なり、あゝるを契沖の月三競
た、月三乗トてと云が如しといへるをさかへり、十三
二、天雲之影塞所見、隱來笑長谷之河者、云く、奥津浪諍榜
入來、白水郎之釣船とあるも、吾サキニトアラソウテコ
ギイリコヨといふ意なり、廿卷 五十 和多流日能加氣
尔伎保比豆多豆祢豆奈とあるも、アラソフと云意なり。
新古今集も、をやくより、甲らハ友ざちよて侍々る人の
年ごろ經て行あひさるが、おのゝよて、七月十餘日トラカマツリヒの月
よきちひて歸侍りければ、紫式部めぐりあひて見トヤ

それとも分ぬまふ雲かくれよ一夜半の月哉とあるき
おひても同意なり。船藝保布などいふも。ワレサキニト
船ノコギアラソフといふ意なり。

きむ キヨウ

將生イキムと云ハイキヨウ。將盡ツキムと云ハツキヨウと俗よ云よ
同ト。將和ナキムなど云ギムもギヨウと云意よて同ト。

きらくー キレイ ビバシイ

九卷ナナ。腰細コシホソ之ノ。須輕スガレ娘子ヲトメ之ノ。其姿ソノカホ之ノ。端正キラクシキニ云々とあ
るハ。其ナリフリハキレイナニの謂なり。靈異記よ。端正
岐良キラクシ之ノ。字鏡ジキョウ。嫩媛ハキメ支良シラクシ之ノ。志シなどあり。或ハビバ

シイとも譯すべし。來御響香津等鳴呼蘇葉屋氏神來

○く部 目 吻 結 御 雲 公 爲 松 貝 吾 草 須 有 退 込 呼 咄 掛

くちウケルゲル

懽ウシク久クを。俗よウレシウ。悲カシク久クを。俗よカナシウといへ
り。○手向タマウを。俗よタムケル。平具タヒラグを。俗よタヒラゲルとい
へり。

く クッル

十九サニ。遥ハルく。尔ニ。鳴ナク。霍ホト。公キス。鳥タチ。立タチ。久ク。ハ。ト。等ト。羽ハ。觸アリ。尔ニ。知チ。良ラ。須ス。藤フジ
浪ナミ。乃ノ。花ハナ。奈ナ。都ツ。可カ。之シ。美ミ。云ク。十ト。卷マキ。三ミ。春ハル。去サレ。者バ。伯モ。勞ラ。鳥ツ。之ノ。草クサ
具グ。吉キ。雖モ。不ズ。所ト。見ミ。吾ハ。者ミヤ。見ミ。將ラム。遣キミ。君ガ。之アタリ。當ハ。者ハ。十ト。七チ。一イチ。安ア。之シ。比ヒ

奇能山邊尔乎礼婆保登等藝須木際多知久吉奈可奴日
波奈之又夜麻扶枳能之氣美登毗久ハナシ聞良牟伎美波登母之毛ハナシなどある久クハクバル久吉ハ
クバリといふことなり。

くゞつ ワラノフクロ

三卷ニ塩干乃三津之海女乃久具都持玉藻將苜率
行見とあるハ藁よてあみとる囊なりとそ。

くさどろ トリクサニスル

十卷十九月夜吉鳴霍公鳥欲見吾草取有見人毛欲得
十九十七霍公鳥來鳴響者草等良牟花橘乎屋戸尔波

不殖而るどあるハをべて本草の枝を取とまりて鳴を
草取と云るよて俗よトリクサニスルといふことなり。

くまくくくくくをはくく奇妙

十八三十七夕歌よ宇都世美能代人和礼母許己乎之母
安夜尔久須之弥云く十九廿六處女墓歌よ古尔有家流
和射乃久須波之伎事跡言繼云くこれ世よ平常よ異
て奇アヤく妙タマなる由の言よて常よ奇妙といふよあされ
已續紀稱徳天皇詔よ特尔久須之久奇事乎思議許止極
難之とあるも同ト日本紀よ靈異奇などの字をクシビ
と訓るこれも同ト源氏物語よをうけづきくをから

む。枕冊子。物いみなどくをうするもの。宇治拾遺
は。物いみしくをういむやつは。などあるををドめて。
をべて中昔の書よくをうと云るは。言の様いさゝあさ
がへ。これも本ハ同ト言なるべけれど。後ハ轉りたる
ものならむ。

くそかづら へクソカヅラ

十六 丁 廿四 葛英尔延於保登禮流屎葛絶事無官將為と
あるは。俗ハ へクソカヅラ といふものなり。

くどつ オトロヘル

五卷 丁 十八 和我佐可理伊多久多知奴久毛尔得夫久

須利波武等母麻多遠知米也母とあるは。オレガワカガ
カリデタノモシウ思ウテ居タ齡ガ。此セツキツウオト
口ヘタといふ意なり。
くどつ クチサセル
十九 丁 廿九 宇能花乎令腐霖雨之始水逝緑木積成將因
兒毛我母十卷 丁 十三 春去者宇乃花具多思吾越之妹我
垣間者荒來鴨などある。久多須ハ。俗ハ クチサセル とい
ふ意なり。
くにもせよ 國一パイニ
説セ部よ出。

くはカラバカラウナラ

十二^{丁十八}野干玉^ノ夜渡月^ノ之清者^ハ吉見^テ而申^ル尾君^ノ之光儀

乎^ヲとあるハ清^サケカラバ或ハ清^ケカラウナラと云意^ナリ

リ古今集^ニ見^ルむもあらば見^ルもせぬ人の戀^ハくハあや

なく今日やなめくらさむとあるハ戀^シカラバ或ハ

戀^シカラウナラと云意^ナリ又人目故^ニ後^ニあふひのを

るけくハ^ハ日^ノつらきよや思^ヒなさまむとあるハハル

ケカラバ或ハハルケカラウナラと云意^ナリ

くまみ入^ル曲^ツタトコロ^ニ五^卷玉^ノ粹^ノ乃^レ道^ノ久^ク麻^ノ尾^ノ久^ク佐^ノ太^ノ袁^ノ利^ノ志^ノ婆^ノ刀^ノ利

志^シ伎^キ提^テ云^クとあるこの假字^ハよりて集中^ニ隈^ノ田^トとあ
るをバ^ハいづれもク^ニミ^ト訓^ベト入^ルマ^ガツ^タト^コロ^ト
いふことなりあ^ハ隈^ノとのみいふよりハ今^ノ少^クく^ニを^シ
きなり

くる^ハジ^ユツ^ナク

三^卷十八^丁苦^ク毛^モ零^シ來^ル雨^ノ可^ク神^ノ之^ノ埒^ノ狭^ク野^ノ乃^レ渡^ル尔^ノ家^ノ裳^ノ不^レ有^ル

國^ニ八^卷廿^二霍^ノ公^ノ鳥^ノ無^ク流^ル國^ノ尔^ノ毛^モ去^リ而^シ師^ノ香^ノ其^ノ鳴^ク音^ノ乎^ヲ聞^ク

者^ハ辛^ク苦^ク母^ノ又^ニ衣^ノ手^ノ尔^ノ水^ノ澁^ク付^ル左^ノ右^ノ殖^ル之^ノ田^ノ乎^ヲ引^ク板^ノ吾^ノ波^ノ

倍^ハ真^ニ守^ル有^ル栗^ノ子^ノなどある苦^ハ俗^ニジ^ユツ^ナイといふ^ハ
あされり

くる○くれ ケル ギル
 手向流を俗よタムケル。過流を俗よスギルといへり。久
 礼も許曾のかゝりの結ひ詞の異なるのみよて。譯言ハ
 同トことなり。さて凡て雅言よハ。五十音の第三位の宇
 韻よて云ることを俗言よハ。第四位の衣韻よ換て云こ
 と常なり。其ハ宇流得といふをエル。佐豆久流授といふ
 をサヅケル。宇湏流失といふをウセル。米豆流愛といふ
 をメデル。可佐奴流重といふをカサ子ル。多々布流湛と
 いふをタ々へル。曾牟流といふをソメル。美由流所見と
 いふをミエル。美太流々乱といふをミダレル。宇々流植

といふをウエルといふ類多し。これ皆第三位を。第四位
 よあへていふ例よて。雅言の多牟久流を俗言よタムケ
 ルといふを此定なり。又上の如く雅言の第三位の宇韻
 よていへることを俗言よハ。第二位の伊韻よかへてい
 ふこともあり。其ハ於久流起といふをオキル。於母美湏
 流重といふをオモンジル。於都流落といふをオチル。志
 布流強といふをシヒル。宇良牟流恨といふをウラミル。
 久由流悔といふをクイル。といふ類なり。これ皆第三位
 を第二位よ換ていふ例よて。雅言の湏具流を俗言よス
 ギルといふを此定なり。後皆これらよ准ふべし。これ古

の雅言といへると。今世の俗言といふとの異なり。但し古書よとまゝ伊佐都流泣といふべきを、伊佐知流といひ、阿良夫流荒といふべきを、阿良毘流といふことも見えとれば、第三位といふを、第二位と換ていふこと、必、雅言と俗言とのをりともいひつゝとともいふべけれど、これハ古の一の轉語の例にて、なべての雅言と俗言との差異とハ別なりと知べし、それくをしきことハ、ここよいひつゝがと、さて又古言よ、第四位の衣韻にて、多豆流、曾米流などいふハ、雅言の多都流を俗言よ、夕テル、雅言の曾牟流を俗言よ、ソメルといふ類とハ異よ

て、雅言よ云る多底流ハ立而有の縮で、曾米流ハ漆而有の縮で、とるよて、心まかせよ、それよも此よも通ハト云とるよハあらば、もとよりその差別ありていへることなり。此處をくをしく味ひてきとめざれば、雅と俗との差異を混ミ乱ることあり、よく考べし。

○け部

け 年月 月日 日數

十卷 廿六 丁 真氣長戀心自白風妹音所聽、紉解設名、又 一冊
 丁 真氣長河向立有之袖、今夜卷跡、念之吉沙、十一 四十 丁 五
 吾戀者名草目金津、真氣長夢不所見而、年之經去礼者、亦

どある。真氣の真ハ。真日。真直など云真よて。氣ハ來經の
縮でとる言なれを。年月といふことよ。月日といふよ
しよ。日數といふこと、ろよ。日とりてきこゆ。各其歌
よよりて斟酌あるべし。されバ此歌どもの氣ハ。年月の
うへよ。日とりてきこゆめり。二卷。八。君之行氣長成奴。
山多都祢迎加將行待尔可將待。十一。五。真氣永夢毛
不所見。雖絶。吾之片戀者。止時毛不有。とある氣ハ。年月の
ことよ。月日。のよ。よ。日とりてきこゆ。四卷。十二。よ。
一日。社人母待告。長氣乎。如此所待者。有不得勝とあるハ。
月日といふことよ。日數といふよ。よ。日とりてき

けこえと。り。イコトハ。イヤウハ。イコトニ。イコトヨ
けく。イコトガ。イコトハ。イヤウハ。イコトニ。イコトヨ
十七。廿三。よ。宇知奈妣吉等許尔許伊布之伊多家苦之日
異益云く。又。廿二。宇都追尔之多。太尔安良祢婆孤悲之家
口。知弊尔都母里奴。云くなどあるハ。イタイコトガ。コヒ
シイコトガと云意なり。二卷。廿四。よ。引放箭繁計久大雪
乃。亂而來禮。云く。十卷。廿三。よ。廼者之戀乃繁久夏草乃。苜
掃友。生布如るどあるハ。シゲイコトハ。或ハシゲイヤウ
ハと云意なり。十七。廿六。よ。可奈之家口。許己尔思出伊良
奈家久曾許尔思出。云くとあるハ。カナシイコトニ。コハ

ロヨハイコトニといふ意なり。十八丁廿一丁。宇礼之家久ク伊余與於母比豆云くとあるも。ウレシイコトニと云意
 して同ト。八卷五十丁。高山之菅葉之努藝零雪之消跡可
 曰毛戀乃繁鷓鴣十卷五十丁。於黄葉置白露之色二葉毛
 不出跡念者事之繁家口などあるハ。シゲイコトヨと云
 意なり。

けくのイコトガ
 十七丁廿六丁。伊多家苦乃日異麻世婆云くとあるハ。イタ
 十イコトガといふ意なり。
 けくはちイコトハ

十八丁十九丁。保登等藝湏伊登祿多家口波橘能播奈治流
 等吉尔伎奈吉登余牟流とあるハ。子夕マシイコトハと
 云意なり。

けくをイコトヲ
 繁計久乎とやりと云るハ。シゲイコトヲといふ意なる
 こと。吾戀良苦乎行卷乎欲あど云ハ。コフルコトヲ。ユカ
 シコトヲと云意なるよ相准べし。

けくもイコトモ
 十一丁三丁。吾妹兒尔戀尔可有牟奥尔住鴨之浮宿之安
 雲無十二丁廿二丁。朝日指春日能小野尔置露乃可消吾身

惜雲無などあるハ、ヤスイコトモ、ヲシイコトモと云意なり。

けくふ イコトヂヤニ

繁計久尔とやう云るハ、シゲイコトヂヤニといふ意なり。人之聞久尔と云ハ、キクコトヂヤニと云意なるも相准べし。十四丁 安豆左由美欲良能夜麻邊能之牙可久尔伊毛呂乎多氏天左祢度波良布母とあるも、家久尔と云べきを、東歌よ、可久尔と云るよて、シゲイコトヂヤニの意なり。此歌ハ、自の家のあとりよ女を率て来て、さてまづ其家の外なる欲良の山は木陰よ、女を隠し置

て、自の家よ入て寝處の塵を拂ひ、夜床を設るさるを云りときこえされば、欲良の山の繁くて、さぞびとあるらむよの意なれど、譯言ハシゲイコトヂヤニなり。もてかく、けく、さく、あく、はく、まく、らくなどの類、みれ同格よ用く、辞よて、譯言も大らと同トさまなり。なを各、其條條を合考べし。

けく ウテアル

一卷 見吉野乃山下風之寒久尔為當也今夜毛我獨宿牟四卷 拷繩之永命乎欲苦波不絶而人乎欲見社八卷 秋田乃穗田乎鴈之鳴聞尔夜之穗杼呂

尔毛^{ニモ}鳴渡^{オキワタル}可聞^{カキカケル}九卷^モ丁^ニ二^ニ。欲見^{ミツクホリ}君來^{キミキマセリ}座登^ト熱尔^{アツクニ}汗可^{アセカ}伎奈^{キナ}
 氣伎^{ゲキ}木根^{コノネ}取^{トリ}嘯鳴^{ウツクホリ}登^ト云云^{クニ}同卷^ト丁^ニ三^ニ。草枕^{クサマクラ}客之^{客ノ}憂乎^{ウレシクナラシム}名草^{ナクサ}
 漏事^{ハルコト}毛有^{モアラム}武跡^{ムト}云云^{クニ}筑波^{ツクバ}嶺^ノ乃^ノ吉久^{ヨシク}乎^ヲ見者^{ミレバ}云云^{クニ}などある。
 寒^{サマケ}久尔^{クニ}ハ寒^{サマ}ウテアルニ^ニ。欲^{ホシ}苦波^{クハ}ハ欲^{ホシ}ウテアルヲ^ヲの意^イな
 也^ニ古事^{コト}記^シ神武^{カムヤマト}天皇^ノ御歌^ノ多^タ知^チ曾^ソ婆^バ能^ノ微^ミ能^ノ那^ナ祁^ケ久^ク遠^ト許^コ
 紀志^{キシ}斐^ヒ惠^エ泥^ニ云云^{クニ}伊^イ知^チ佐^サ加^カ紀^キ微^ミ能^ノ意^イ富^ホ祁^ケ久^ク袁^{エン}許^コ紀^キ陀^ダ斐^ヒ
 惠^エ泥^ニとあるも長^{ナガ}ウテアルヲ^ヲ多^{オホ}ウテアルヲ^ヲの意^イなり古
 今集^{イマツミ}也^ニ世^ヨの中^ノ此^{コノ}うけくよあきぬ奥山^{ウチヤマ}の木^ノ葉^ハよふれる
 ゆきやけるまゝとあるも憂^{ウレシ}ウテアルニ^ニアイタと云意
 なり又^{マタ}まめなれど何^{ナニ}をいよけくかるるやの乱^{マシ}れてあ

れどありけくもぬしとあるも善^ヨウテアルと云意^イなり。
 よけきと云ずしてよけくと云るハ其意^イなるが故^ユあり。
 餘^{オホ}ハこれよ准^タへ知^チべし。
 けしきこゝろ^{カハツタ}心^{ココロ}
 十一^ト六^ニ。朱^{アカラビク}引^{ヒク}秦^{ハクセ}不^フ經^ス雖^シ寐^シ異^イ心^{ココロ}我^ガ不^フ念^ス。異^イ心^{ココロ}。舊^{キウ}本^{ホン}下^カ十四
 廿^ニ三^ニ。可^カ良^ラ許^コ呂^ロ毛^モ須^ス蘇^ソ乃^ノ宇^ウ知^チ可^カ倍^ヘ安^ア波^ハ祢^ネ杼^シ毛^モ家^ケ思^シ吉^キ
 己^コ許^コ呂^ロ乎^ヲ安^ア我^ガ毛^モ波^ハ奈^ナ久^ク尔^ニ又^{マタ}安^ア良^ラ多^タ麻^マ能^ノ等^ト之^シ能^ノ乎^ヲ
 奈^ナ我^ガ久^ク安^ア波^ハ射^セ礼^レ杼^シ家^ケ之^シ伎^キ許^コ己^コ呂^ロ乎^ヲ安^ア我^ガ毛^モ波^ハ奈^ナ久^ク尔^ニ
 どあるハカハツタコ、口といふことなり。
 けだし サダメシ モシ シゼン

二卷十四。古尔戀良武鳥者。霍公鳥。盖哉鳴之。吾戀流其騰とあるハ。サダメシナイタデアラウカの意なり。サダメシ吾古ヲ戀シウ思フヤウニ。古ヲ慕ウテ鳴タデアラウカと謂なり。盖ハ戀流へ関れる言なり。新撰字鏡。儻設也。若也。侗也。太止比。又介太志とあり。按。からぶみ。盖と云る字ハ。たなくハ發語。辞にて。盖自天降生民などやう。又常小用するを。とま。くハ疑。辞も用ひて。盖有之。我未之見也。とやう。よいひ。ころることあり。サダメシアルデアラウ。我ハ。タ見ヌとの義なり。集中。用するハ。疑の辞にて。發語。用すること。さら。ま。なく。三卷四十。山

主者。盖雖有。吾妹子之。將結標采。人將解。八方とあるハ。サダメシ山守ハアルデアラウモ。山守ハ有トモと云意なり。同卷四十。百不足。八十隈坂尔。手向為者。過去人尔。盖相牟鴨とあるハ。サダメシアフコトモアラウカとの意なり。十卷四十。奈何牡鹿之。和備鳴為成。盖毛秋野之。茅子也。繁將落とあるハ。サダメシ野ヘンノハギノ花カ大分チルデアラウカとの意なり。四卷四十。盖毛人之中言。聞可毛。幾許雖待。君之不來座とあるハ。サダメシ。或ハモシ。或ハシゼンといふ意なり。同卷四十。夜晝云。別不知。吾戀情。盖夢所見。寸八とあるハ。サダメシ。夢ニ見エ

タデアラウカ。或ハモシヤ夢ニ見エタデアラウと云意
 なり。同卷五十丁七ニ。吾妹子之屋戸乃芭乎見尔往者。盖從門
 將返却可聞とあるハ。サダメシ門ヨリカヘラスルデア
 ラウカ。或ハモシ門ヨリカヘラスルデアラウカの意な
 り。十一丁サハニ。馬音之跡。杼登毛為者。松陰尔。出曾見鶴若
 君香跡とあるハ。サダメシ君デアラウカとの意なり。十
 二丁トニ。夕ヨ夕ヨ尔。吾立待尔。若雲君不來益者。應辛苦とある
 也。モシヤ君ガゴザラスハの意なり。十九丁卅ニ。可久古非
 婆意伊豆久安我未氣太志安倍年可母とあるハ。カヤウ
 ニ戀シウ思ハバ。年ヨツタ吾身ノヨウコタヘテアラレ

ウカ。サダメシヨウコタヘヌデアラウとの意なり。安倍
 ハ堪アなり。サダメシヨウコタヘヌデアラウとの意なり。云意
 けちケシ三卷二十丁七ニ。燎火乎。雪以滅落雪乎。火用消通都云くとあ
 る滅消ハケシと云ことなり。字鏡ニ。謂火滅為燧。火介知
 乎佐牟伊勢物語ニ。とも一氣知るとあるも同ト。
 けふカクベツトトリワケテ
 十卷四十丁二ニ。妹手乎。取石池之浪間。從鳥音異鳴。秋過良之
 とあるハ。カクベツニ鳴との意なり。又トリワケテとも
 十譯をべし。

けまくハ ケンヤウハ

三卷 四十 角障經石村之道乎朝不離將飯人乃念乍通

計万口波云とあるハ通ヒケンヤウハの意なり

けむ○けめ ケヨウ カラウ タデアラウ タデアラウワイ

將解將更などあるハトケヨウフケヨウと云意なり將

遂など云ゲムもトゲヨウと云意よて同ト○深氣武繁

氣武などあるハフカカラウシゲカラウと云意なり○

有氣武行氣武などあるハアツタデアラウイタデアラ

ウ或ハアツタデアラウワイイタデアラウワイと云意

なり氣米も許曾の如く此結びの異なるのみよて譯

言ハ同ト

けやよのサツパリ

十六 丁 琴酒乎押垂小野從出流水奴流久波不出寒

水之心毛許夜尔所思音之少寸道尔相奴鴨云とある

を俗よサツパリトオモハレルと云意なり雄畧天皇紀

一太貴と見え中昔物語書よけさやると云詞多く見え

さりみれ同意なるべし

けり○ける○けれ タワイ イタ タ イダ

露置尔氣理と云ハ露がオイタワイと云意零氣理と云

をフツタワイと云意なり氣流氣礼も上のかよて

結びの異なるのみよて、譯言ハ同トことあり。○十五
二、和我由惠仁妹奈氣久良之風早能字良能於伎敝尔奇
里多奈妣家利とあるハ、タナビイタといふ意なり。又行
家理ハイタ、來氣理ハキタといふ意。又仰氣理ハア
イ
カといふ意なり。かくて行氣理ハ行而有來氣理ハ來而
有の約れる言よて、棚引理ハ棚引而有仰氣理ハ仰而有
の約なるよ、其餘をも准知べし。凡て五十音の第四位の
衣韻よて、勢留、氏留、祢留、弊留、米留、礼留などいふ類ハ、
づれも此定よ意得べきことなり。ととへバ、可射勢留ハ
挿頭而有の約、多氏留ハ立而有の約、都可祢留ハ束而有

の約、尔保弊留ハ薰而有の約、曾米流ハ深而有の約、夜杼
礼留ハ宿而有の約なる如く、いづれの詞よても、此定よ
意得るときハあふふことあし。されバ可射勢留ハ、俗言
よカザイタ、多氏留ハ俗言よタツタ、都可祢留ハ俗言よ
ツカ子タ、尔保敝留ハ俗言よニホウタ、曾米流ハ俗言よ
ソウダ、夜杼礼留ハ俗言よヤドツタといふ意よるれり。
由氣留ハ行而有の約よて、俗言よイタと云を此定なり。
志のろを此上よも云とる如く、雅言の多都留を俗言よ
タテル、雅言の都可奴留を俗言よツカ子ル、雅言の曾牟
流を俗言よソメルといふ類ハ、雅言の第三位の字韻を、

俗言は第四位の衣韻をかへていふ例にて、これ雅と俗
とによりて、その用へるやうの異れるなり。されば俗言
よソメルといふをバ、雅言よ曾牟流といひ、俗言よソウ
ダといふをバ、雅言よ曾米留といふこと、意得るとき
を、いづくもありてもさふことあり、後皆此例に准べ
し。ようせずハ雅言と俗言との用ひ様を、混乱るべきこ
とそあり。

○こ部

こ コヨゴザレ
六卷 丁 卅四 我屋戸之梅咲有跡告遣者來云似有散去十

方吉とある來云ハ、コヨトイフ。或ハゴザレトイフとい
ふ意なり。いづれも此、定は心得べし。

こい コロブ

九卷 二十 濱毛勢尔後奈居而反側戀香裳將居とある
ハ、コロビマロビと謂なり。許伊卧といふも、コロビ卧と

いふことなり。

こく シゴク

十九 丁 廿二 藤浪乃花奈都可之美引攀而袖尔古伎礼都
漆婆漆等母廿卷 四十 安吉加是能布伎古吉之家流波
奈能尔波伎欲伎都久欲仁美礼杼安賀奴香聞などある。

古伎ハ俗ヨシゴキといふも同ト。
こ、だく○こ、ばく○こきだく○こきばく○こ、だ○
こきだ○こきー○こ、ば

ヨツポド ヨケイ

四卷四十丁。蓋毛人之中言聞可毛幾許雖待君之不來座
とあるハ。メツソフ待ドモの意なり。十七四十丁。安麻射
可流比奈等毛之流久許己太久母之氣伎孤悲可毛奈具
流日毛奈久とあるハ。メツソウシゲイ戀ゴ、チガスル
哉との意なり。或ハツモリシレズシゲイ戀ゴ、チガス
ル哉ともきくべし。同卷三十丁。布勢水海を許己婆久毛

見乃佐夜氣吉加とあるハ。メツソウ見ハラシノアザヤ
カナコト哉との意なり。或ハ見ハラシノツモリシレズ
アザヤカナコト哉ともきくべし。二卷四十丁。御笠山野
邊往道者己伎太雲繁荒有可久尔有勿國とあるハ。メツ
ソウアレタコト哉との意なり。廿卷廿五丁。難波海を曾
伎太久毛於藝呂奈伎可毛己伎婆久母由多氣伎可母と
あるハ。メツソウ寛カニヒロイコト哉との意なり。五卷
十八丁。伊母我陸尔由岐可母不流登弥流麻提尔許と陀
母麻我不烏梅能波奈可母とあるハ。マチガフマデヨツ
ホドサイタとの意なり。古事記神武天皇大御歌は古那

美賀那許波佐婆多智曾婆能微能那那久袁許紀志斐惠
泥宇波那理賀那許波佐婆伊知佐加紀微能意富那久袁
許紀陀斐惠泥とある。許紀志許紀陀ハ己許太と同言な
り。ヨツポド。或ハヨケイともきくべし。十四ハ二十。思良
久毛能多要尔之伊毛乎阿是西吕等許己吕尔能里氏許
己婆可那之家とある。許己婆も同言あり。

ろくしシホラシウ
四卷一丁。春日山霞多奈引情具久照月夜尔獨鴨念と
あるハシホラシウ月ガテツテオモシロイ夜ラ君十二
人居ルナラドレホドカタノシカラウト思フニモシ君

ガゴザラズハタバ獨宿ヲセウカといへるなり。同卷五
九。情八十一。所念可聞春霞輕引時二事之通者。八卷十
丁。情具伎物尔曾有鷄類春霞多奈引時尔戀乃繁者十
二。廿三。意具美吾念兒等之十七。廿九。己許吕具志伊
射美尔由加奈又三。丁。相見婆登許波都波奈尔情具之眼
具之毛奈之尔とある。奈之ハ無の謂よあらず。情ぐ。眼ぐ
之毛奈之尔とある。奈之ハ無の謂よあらず。情ぐ。眼ぐ
くあることを云るよて待。ことを待奈久と云奈久も同
ド。
こぶしきカドくシイ

三卷 二十 二 盤金之凝敷山乎超不勝而哭者泣友色尔將
 出八方七卷 十 丁 神左振磐根已疑敷三芳野之水分山乎
 まさ 三十 丁 石金之疑木敷山尔入始而十三 廿 丁 石根乃興
 凝敷道乎石床笑根延門呼などあるハ磐石ノ重リテカ
 ドくシイと謂なり三卷 二十 丁 極此疑伊豫能高嶺乃十
 七 四十 丁 許其志可毛伊波能可牟佐備などあるも同ト
 こゝろやる 保養スル 子シバラシ キホウジ
 三卷 廿三 丁 夜光玉跡言十方酒飲而情乎遣尔豈若目ハ
 方とあるハ俗ニ保養スルニと云意まきこえさり十一
 丁 戀事意追不得 出行者山川不知來又九 雲谷灼發意

追見乍為及直相 このニの追ハ 十二 二 忘哉語意遣雖
 過不過猶戀十七 三十 丁 於毛布度知許己呂也良武等十
 九 廿 丁 見明良米情也良牟等などあるも准べし又子
 バラシ或ハキホウジなどゝも歌ふよりて譯すべし
 こト 根引 根コゼ 根コギ
 八卷 十四 丁 去年春伊許自而植之吾屋外之若樹梅者花
 咲尔家里とある伊ハそへ言よて許自ハ根をからし掘
 取ることよて俗ニ根引ニスル或ハ根コゼニスル或ハ
 根コギニスルといふも同ト古事記ニ天香山之五百津
 真賢木矣根許士尔許士而云く

こせね〇こせぬあも ナニトゾ

九卷^九 城國^キ爾^ニ不止^ズ將往^ハ來^ム妻^ツ社^ツ妻^ツ依來^コ西^ニ尼^ツ妻^ツ常言^ト長^ガ
柄^ラとあるハ ナニトゾ妻^ヲ吾方^ヘヨセヨとの謂なり來^ラ
西^ヒとあるも來^ハ許^コの借^リ字^ニよて來^ル字^ニ意^ハハあらず乞^ヒな
る乞^ヒハ有^リ許^コ曾^ツ行^キ許^コ曾^ツなどいふ巨^コ曾^ツの轉^リ通^ルよて希^シ望^シ辞^ヲ
なりさてこの辞^ハ常^ハ巨^コ曾^ツとのみ云^フを祢^チの言^ハへ連^ネ云^フ
ときハ曾^ツを勢^ニ轉^シて云^フ古言^ノ格^{ナリ}祢^チもねがふ意
の辞^{ナリ}十四^九 爾^ニ波^ハ多^タ都^ツ安^ア佐^サ提^テ古^コ夫^フ須^ス麻^マ許^コ余^ヨ
比^ヒ太^タ爾^ニ都^ツ麻^マ余^ヨ之^シ許^コ西^ヒ祢^チ安^ア佐^サ提^テ古^コ夫^フ須^ス麻^マとあるも全^ク同
古事^ニ記^ス八^ハ千^ニ矛^ニ神^ニ御^ニ歌^ニ宇^ツ知^チ夜^ヤ米^メ許^コ世^セ祢^チとあるもナ

ニトゾウチタハイテ鳴^コトヲ止^サセヨとの謂^{ナリ}ニ
卷^{十五} 芳^{ヨシ}野^ノ河^ガ逝^セ瀬^ノ之^ノ早^{ハヤ}見^ミ須^シ臾^{シク}毛^モ不^ヨ通^ト事^{ナク}無^{アリ}有^コ巨^コ勢^セ濃^メ
香^カ毛^モとあるハ ナニトゾヨドムコトナウアレカシとの
意^{ナリ}なりさてこれも巨^コ勢^セ濃^メハ巨^コ勢^セ祢^チの意^{ナリ}なるを可^カ母^モと
云^フへ連^ツくるときハ祢^チをりつて濃^メと云^フ例^{ナリ}なり四^ニ卷^ノ
四^ノ 百^モ夜^ヨ乃^ノ長^{ハク}有^{アリ}與^コ宿^ソ鴨^{カモ}五^ノ卷^ノ十五^ノ 和^ワ我^ガ霸^ハ能^ノ曾^ノ能^ノ阿^ア
利^リ己^コ世^セ奴^ヌ加^カ毛^モ十^ノ卷^ノ九^ノ 今^イ之^シ七^ナ夕^ヤ續^ツ巨^コ勢^セ奴^ヌ鴨^{カモ}などあ
るみ形^ニ同^シ例^{ナリ}なり

こそ ナニトゾ

有^{アリ}許^コ曾^ツ行^キ許^コ曾^ツなど云^フハ ナニトゾアレ ナニトゾユケと

云意なり。

こだろ 枝葉ノタレサガル

三卷^{二十}五^丁 東市^{イチノ}之^ノ殖木^{ウヰキ}乃^ノ木足^{コダレ}左右^{ミダ}不相^{アハズ}久美^{ヒサミ}宇倍^{ウベ}戀^{コヒ}尔^ニ家利^{ケリ}十四^{十四}十六^{十六} 多^タ伎^キ木^キ許^コ流^ル可^カ麻^マ久^ク良^ラ夜^ヤ麻^マ能^ノ許^コ太^タ流^ル木^キ乎^ハ麻^マ都^ツ等^ト奈^ナ我^ガ伊^イ波^ハ婆^バ古^コ非^ヒ都^ツ追^ツ夜^ヤ安^ア良^ラ牟^ムなどある。みな枝葉ノタレサガルと謂る。

こちぐ アチコチ

二卷^{三十}八^丁 打^{ウツ}蟬^{セミ}等^ト念^{オモヒ}之^シ時^{トキ}尔^ニ取^ク持^{サヘ}而^テ吾^{アガ}二^{フタ}人^{タリ}見^ミ之^シ超^{ワリ}出^デ之^ノ堤^{ツミ}尔^ニ立^{タテ}有^ル槻^ヰ木^キ之^ノ己^コ知^チ基^キ智^チ乃^ノ枝^エ之^ノ春^{ハル}葉^ハ之^ノ茂^シ之^ノ如^{ゴトク}久^ク云^ク三^三卷^サ七^七 奈^ナ麻^マ余^ヨ美^ミ乃^ノ甲^カ斐^ヒ乃^ノ國^{クニ}打^{ウチ}縁^エ流^ル駿^{スル}河^カ國^{クニ}與^ト己^コ智^チ

其^コ智^チ乃^ノ國^{クニ}之^ノ三^ミ中^{ナカ}從^ユ云^ク九^九卷^セ一^一 白^{シラ}雲^{クモ}乃^ノ立^{タテ}田^タ山^{ヤマ}乎^ハ云^ク云^ク許^コ智^チ期^キ智^チ乃^ノ花^{ハナ}之^ノ盛^{サカ}尔^ニ云^クるなどあるハ、アチコチの意あり。そもく彼^カ方^{カタ}此^コ方^{カタ}と云^フべきを、此^コ方^{カタ}此^コ方^{カタ}と云^フハ、此^コ方^{カタ}より彼^カ方^{カタ}といふ處ハ、彼^カ方^{カタ}より此^コ方^{カタ}なり。各^カと云^フ言^ハの如^{ゴトク}と云^フ。この言^ハ古^コ事^{コト}記^キ雄^ユ畧^{リョク}天^{テン}皇^{スミ}條^{ジョウ}も見^ミえて、其^{コノ}傳^{デン}ハ、荒^{アラ}木^キ田^タ氏^シの説^{セツ}を引^ヒて委^{オミ}く注^{チュウ}せり。

こつみ アクタ

廿^ニ卷^マ三^三 獨^{トク}見^ミ江^エ水^{ミヅ}浮^ウ漂^{ヒラ}糞^{コノミ}怨^{ウラミ}恨^ミ貝^カ玉^{タマ}不^ラ依^ヨ作^シ歌^カ保^ホ理^リ江^エ欲^コ利^リ安^ア佐^サ之^シ保^ホ美^ミ知^チ尔^ニ与^ヨ流^ル許^コ都^ツ美^ミ可^カ比^ヒ尔^ニ安^ア里^リ世^セ婆^バ都^ツ刀^ト

尔勢麻之乎とあり。木積の意にてアクタのことなり。十
四^{卅ニ}は。奈流世呂尔木都能余湏奈湏云くとある。木都
も木積なり。もハ木都能ハ。木都美を誤れるものよも
あるべし。

ことごとくソレくアリダケ
ミンナ
井サイ

一卷^{十六}は。玉手次畝火之山乃檀原乃日知之御世從阿
礼座師神之盡。膠木乃弥繼嗣尔天下所知食之乎云くと
あるハ。俗は神様ソレくと云むごとし。十二^{卅五}は。
惡木山木末悉明日從者靡有社妹之當將見とあるハ。梢
ガソレくと云むが如し。日之盡。夜之盡など云ハ。日ノ

リダケ。夜ハアリダケと云むが如し。世之盡。國內盡など
云も同じ。或ハミンナとも譯すべし。又井サイと聞て宜
しき所もあるべし。

ことなす イヒサガス
四卷^{十七}は。秋田之穂田乃刈婆加香縁相者。彼所毛加人
之吾乎事將成。七卷^{三十}は。山跡之宇陀乃真赤土左丹着
曾許裳香人之吾乎事將成などあるハ。人ノトヤカウイ
ヒサガサウカの意なり。

ことよす 御引合 御利生

四卷^{二十}は。三香之原。客之屋取尔。珠棹乃道能去相尔。天

雲^{クモ}之外^ノ耳^{ミミ}見^ミ管^ツ言^{コト}將^ト問^{ハム}緣^{ヨシ}乃^ノ無^ナ者^バ情^{コロ}耳^ミ咽^ム乍^ツ有^{アル}尔^ニ天^{アメ}地^{ツチ}神^{カミ}祇^ミ辞^{コト}因^ヨ而^テ敷^シ細^タ乃^ノ衣^ヨ手^モ易^カ而^テ自^{オノ}妻^ツ跡^ト憑^タ有^ル今^{イマ}夜^ヨ云^クとあるハ
天地ノ神様ガタノ御引合ニヨツテの謂なり十八
波之吉余之曾能都未能古等安沙余比尔惠美と惠末
須毛宇知奈氣伎可多里家末久波等己之部尔可久之母
安良米也天地能可未許等余勢天春花能佐可里裳安良
牟等末多之家牟云くとあるハ天地ノ神様ガタノ御利
生ニヨツテ富饒ナ勝手ヨシニナル時節モアラウとの
意なりそむく許等余須ハ事依と云と同意にて何事
まれ神祇の大御心より令せ賜ふより云言あり

ことよえてイヒヤウモナウ云メツソウ
四卷五丁^五生有代尔吾者未見事絶而如此何怜縫流囊
者とあるハ言ヤウモナウカヤウニオモシロウ又ウタ
囊ハと謂なり又ハメツソウとも譯すべし
ことあげトヤカウト云タテル
六卷五丁^五二万乃軍奈利友言舉不為取而可來男常曾
念十二丁^九大方者何鴨將戀言舉不為妹尔依宿牟年者
近^ナ綏^キ十三丁^九蜻島倭之國者神柄跡言舉不為國雖然吾
者事上為るどあるハ口ノハニトヤカウト云タテルと
の意なり神代紀に遂到出雲國乃興言曰云く又高言と

も見えたり。...

ことゝく。タカナリ

十一^{三四}言急者^{ハナカハ}中波余騰益水無河絶跡云事乎有超名湯目とあるハ。タカナリガシタラバ。當時ハ中ヨドミ

シテ通ハツシヤルコトヲヤメテ御出被成ヨとの意なり。

ことかさねもち。ツカ子アツメル。カタゲル

十八^{三十}於保伎見能末伎能末^ニ。等里毛知底都^ト可布流久尔能^{トシテ}年内能^ト許登可多^カ称母知云くとある可多^カ称^チハ契冲江次第一^ニ被結とあるを引て。結束の義よて。つゝねあつむるよゝかりと云り。又畧解^ニ。俗ホカタゲ

ルと云ことを北國よてハ。かゝねるといふよゝ云り。其義ならむ。負持意なるべし。

ことゝふ。モノイウ

四卷^{三十一}吾背子之形見之衣。孀問尔余身者不離事不

問友^{十一}。敷細布枕人事問哉其枕。苔生負為十二

卅四^四。如是將戀物跡知者。吾妹兒尔言問麻之乎。今之悔

毛^モなどある言問ハ。モノイフと云意なり。

ことのなぐさ。ロサキバカリデ人ヲナグサメシム

四卷^{四十}。吾耳曾君尔者戀流。吾背子之戀云事波言乃

名具左曾とあるハ。ワシヲ戀シウ思クトオツシヤルハ。

眞實ノ事デハナシタゞ表方ニ。ロサキバツカリデ人ヲ
ナグサメシムルバツカリゾとの意なり。七卷サ四。黙
然不有跡。事之名種ル云言乎。聞知良久波。苛曾在來とあ
るも同じ。

ことはかり 才覺

四卷五十。外居而戀者苦。吾妹子乎。次相見六事計為與。
とあるハ。ツバイテ逢ベキヤウノ才覺ヲ為ヨ。と妹も令
せざるなり。十二七。獨居而戀者辛苦。玉手次不懸將忘。
言量欲とあるハ。心ニカケテオモハズ。忘レハツベキ才
覺モアレカシと云るなり。十三三。新夜乃好去通牟事。

計夢尔令見社とあるハ。息災デイツモ通フベキ才覺ヲ

夢ニ見セテ被下ヨとあり。十二ハ。常如是戀者辛苦。暫
毛心安目六事計為與。又十二ウ。得田價異心鬱悒事計。吉為
吾兄子相有時谷などある。事計も。皆同言あり。

こときよく アイサツバカリ

四卷廿二。事清甚毛莫言。一日太尔君伊之哭者。痛寸取
物とある。事ハ借字にて言なり。痛寸取ハ誤字なるべし。
按。愚不敢などを寫誤れるならむ。さらむ尾句ハ。シマ
ヒアヘヌモノと訓べし。さて歌意ハ。御アイサツバカリ
其ヤウニキツウ結構ニオツシヤルナ。ドウゾシンジツ

ニオツシヤツテ下サレ。ワタシハタツタ一日バカリサヘ
御前ノ御目ニカ、ラ子バドウモコラヘラレヌノチヤニ
と云なるべし。住吉物語。いゝなる夜目よもこそハ志
ろく侍なれ。御口きよさよとあるも。此言清よ似通へり。

ことさらよ。ワザト。ワザク。

四卷^{三十}。出而將去。時之波將有年。故妻戀為乍立而可
去哉。十卷^{三十}。事更尔。衣者不摺。佳人部為咲野之芽子
尔。丹穗日而將居などあるハ。ワザト。或ハワザク。など云
意なり。

ことなる。事成就。

九卷^{十八}。海若神之女。尔邂逅。伊許藝超相詭。良比言成
之。賀婆云くとあるハ。言ハ借字にて。事成就シタレバと
云意あり。

こと。コノヤウニ。

七卷^{三十}。殊放者。奥從酒嘗。湊自邊著。經時尔。可放鬼香
とあるハ。コノヤウニ遠ガカルクラ井ナラの謂なり。十

三^{三十}。琴酒者。國丹放。嘗別避者。宅仁離南とあるも同
ト。十卷^{五十}。殊落者。袖副沾而可通。將落雪之。空尔消尔

管とあるハ。コノヤウニ落クラ井ナラの意なり。允恭天
皇。紀御歌。波那具波辞。佐區羅能梅涅。許等梅涅。麼波柳

區波梅涅孺和我梅豆留古羅とあるも、コノヤウニシヤ
ウクワンスルクラ井ナラの意なり、古今集春下も、こと
ならバ咲ずやあらぬ櫻花、見るべれさへよまづ心な
とあるも、コノヤウニ早ウチルクラ井ナラの意なり、離
別も、ことならバ君とまるべくよなむかへをハ花
のうきよやハあらぬ戀五も、ことならバ言の葉さへも
消るゝむ見れば涙の瀧まさりけり、俳諧も、ことならバ
思はずとやハ云えてぬ、何ぞ世中の玉とをきなる、後撰
集春も、ことならむ折つくしてむ梅花、吾待人の來ても
見なくもなどあるも、右も准へて意得べし、又十卷

十四

も、如是有者何如殖蕪山振乃止時喪哭戀良苦念者とあ
る、この初句コトナラバと訓べし、新撰万葉も、戀侘景緒
谷不見芝玉桂殊者根佐倍丹堀手捐店とあるハ、コノヤ
ウニ戀シウ思ウクラ井ナラ云くの意なり、此等のこと
ならバをコンナコトナラとも譯すべし、古今集離別も、
かきくらしことハふらなむ春雨も、ぬま衣きせて君を
とぐめむとあるも、コノヤウニマツシグラニナツテヤ
ツパリツヨウスツタガヨイの意なり、

こと 名バカリ

四卷 五十 萱草吾下紐尔着有跡鬼乃志許草事二思安

利家理とあるハ、名バカリデア、ツタワイとの意なるク、七
 卷十一、夢乃和太事西在來、寤毛見而來物乎、念四念者、
 又十三、住吉尔、往去道尔、昨日見之、戀忘貝事、二四有家理、
 又十八、手取之柄、二忘跡、磯人之曰師、戀忘貝言、二師有來、
 又十九、名草山事西在來、吾戀千重一重、名草目名國など
 あるみれ同ト。

ことだて キツト

十八、大伴能遠都神祖乃其名乎、婆大來目主登於
 比母知豆都加倍之官、海行者美都久屍山行者草牟須屍
 大皇乃、敝尔許曾死米、可弊里見波勢自等許等太豆大夫

之、伎欲吉彼名乎、云くとあるハ、大丈夫、此トシタ清
 流於夜能都加佐等許等太豆、佐豆氣多麻、敝流云くと
 あるも、キツト子孫ニ御授被成と謂るリ、日本紀仁徳天
 皇大御歌、子磨臂苔能多菟屢虚等太豆、于瑳由豆流多
 由魔菟餓發珥奈羅倍氏毛餓望古事記同天皇條、言立
 者足母阿賀迦尔嫉妬續紀四卷詔、此食國天下乎、撫賜
 比慈賜事者、辞立不在人祖乃、意能賀弱兒乎、養治事乃如
 久云く、十卷詔、此者事立尔不有天尔、日月在如地尔山
 川有如云く、十七、詔、も見えと、伊勢物語、正月なれ

むことだつとてとあるも同意なり。

こぬれ コズエ

七卷 丁 廿五 曉跡夜鳥雖鳴此山上之木末之於者未静之

十卷 丁 六 春之在者妻乎求等鷺之木末乎傳鳴乍本名十

七 丁 卅六 奈藝左尔波安遲牟良佐和伎之麻未尔波許奴

礼婆奈左吉許己婆久毛見乃佐夜氣吉加云くなどある

木末ハ木之木枝のつゞまれる言よて梢と云お如しそ

の末枝ハ末枝のつゞまりとるなり。

こひわび コヒクダビレ コヒアグンデ

十一 丁 廿五 里遠戀和備尔家里真十鏡面影不去夢所見

社とあるハコヒクダビレタワイ或ハコヒアグンダワ

イといふ意なり。

こひずは 戀シウ思ハウヨリハ

十一 三 十 中く二君尔不戀者枚浦乃白水郎有申尾玉

藻刈管とあるハ君ヲ戀シウ思ハウヨリハの意なり古

事記仲哀天皇條忍熊王歌よ伊奢阿藝布流玖麻賀伊多

豆於波受波迹本杼理能阿布美能宇美迹迦豆岐勢那和

とあるも同ト語格なり。

こふる シヤウクワンズル

二卷 三 丁 衣有者脱時毛無吾戀君曾伎賊乃夜夢所見

鶴とあるハ、シヤウクワンセウと云意なり。三卷四十石竹之其花尔毛我朝旦手取持而不戀日將無とあるハ、
 シヤウクワンセヌ日無ラウとの意なり。十七。許惠乃
 孤悲思吉とあるも同ト。

こゆなきわとる ○こよなきわとる コ、ヲナイテイク

八卷廿四。獨居而物念夕尔霍公鳥從此間鳴度心四有
 良思又廿七。宇乃花能過者惜香霍公鳥雨間毛不置從此
 間喧渡十八六。保等登藝須伊等布登伎奈之安夜賣具
 佐加豆良尔勢武日許由奈伎和多礼又十保等登藝須許
 欲奈枳和多禮登毛之備乎都久欲尔奈蘇倍曾能可氣母

見牟。ちどあるハ、コ、ヲナイテイクといふことなり。

こゆとびわとる意コ、ヲトウデイク

十一十二。妹戀不寐朝明男為鳥從是飛度妹使とある

ハ、コ、ヲトウデイクといふことなり。

ころぶ サイナム

十一十五。誰此乃吾屋戸來喚足千根母尔所噴物思吾

乎とあるハ、母ニサイナムレテの意なり。

○さ、部

さかみづく サカモリヲスル

十八十一。多知婆奈能之多泥流尔波尔等能多豆天佐

可弥豆伎伊麻湏和我於保伎美可母又左加美都伎安蘇
比奈具礼止十九三十九酒見附榮流今日之安夜尔貴左
るどあるハ俗ニ酒モリヲスルといふことなり古事記
雄畧天皇大御歌ニ祁布母加母佐加美豆久良斯多加比
加流比能美夜比登とあるも同ト

さのー ハツサイ カシコイ

三卷三十一古之七賢人等毛欲為物者酒西有良師とあ
るハもろこーよていをゆる竹林の七賢よて七人ノ發
オタチガと云意なり又七人ノカシコイ人タチガとも
聞べし其次ニ賢跡物言從者酒飲而醉哭為師益有良之

とあるハ發オノ自慢シテイロク物ヲイハウヨリハの
意なり古事記八千矛神の御歌ニ佐加志賣遠阿理登岐
加志豆とあるも發オナ女ヲアリト御聞及ヒナサレテ
の意なり日本紀仁德天皇卷ニ賢遺此云左柯之能菅里
神武天皇卷ニ明達崇神天皇卷ニ叡智欽明天皇卷ニ君
子皇極天皇卷ニ哲王肥前風土記ニ此婦如是實賢女故
以賢女欲為國名曰賢女郡今謂佐喜郡訛也日本紀竟
宴歌ニ以末乃散加之支見與尔安布加那字鏡ニ點慧了
也又慧也佐加志土左日記ニこと人々のもありけれど
さのーきもなるべし古今集序ニさのーねるなり

とあるしめしけむ。榮花物語は、御心のひらませ給れば、物のあわれ有さまを知らせ給えぬと、さるしうを聞えさせけるなどあるごとくて、すべて佐可之伎ハ、智深く賢きを云なること、彼古今集序ハ、愚の反対ハ云るよても知べし。然るをや、後ハ轉りて、智深く賢き人をバ、人の恐懼オホカシコまるより、さる人をかゝるときと云ことハ、なりさめれどいと古ハ、賢をかゝるときと云ることハ、一もなくして、この差別いと分明ワキクトか、アゝを、今ハ恐むべきをも、智深きをむなべてかゝるときと云ことよなるハ、いみじき轉なり。按、伊勢物語ハ、昔年頃音づれざりける女、

心ココロのこくやあらざりけむとあれば、彼頃より賢をかゝるときと云そめけむよや、但タしかのココロのこくも、せとハさるサくとありアを、後ハ寫誤シとるよもあらむ。いづれ古ハ、賢をかゝるときと云とることハ、さらなるアき。
さかいら コザカシブル リコウダテ サシデガミシイ カシコダテ
三卷三十三一丁一は、痛醜アチミナウサシラ賢良サシラ乎ハ為跡サト酒不飲サケノマズ人乎ヒトハ焚見ユクミ者ハ猿サル二鴨ニカモ似ニム又マタ二三二三丁丁默然モクダ居リ而シテ賢良サシラ為者ハ飲酒サケノミ而シテ醉泣サケヒナクシ為尔ニ尚ナホ不如シカズ來ケリなどあるハ、コザカシブル、或ハ利口リクダテヲスル、或ハサシデガミシウスル、或ハカシコダテヲスルなど云う如

古今集よさういらは夏ハ人まね篠の葉のさやぐ霜
 夜を吾獨宿伊勢物語よ昔若き男けあうハあらぬ女を
 思ひけりさあいらをるたやあてたもひもそつくと
 て此女をちうへたひやらむとすとあるも利口ダテス
 ちル親アツテのよいらり按よかなしげを悲いらびい
 げをわびいらると云バこれもせとさういげと云意よ
 り云るなるべし其をもと實よ賢きよハあらで賢貌す
 るよりいふなるべし對よ異若ちもさよまもさよ
 さきくも息災さきくも息災のむもさきくもさきくもさきくも
 七卷十七よ樂浪之思賀乃辛崎雖幸有大宮人之船麻知

兼津とあるハ俗よ息災カキツ昔ノマニカハラズアレド
 モと云意なり四卷廿九よ不相見而氣長久成奴比日者
 奈何好去哉言借吾妹十三十言幸真福座跡恙無福座
 者荒磯浪有毛見登云くなどあるも同ト日本紀よ無恙
 平安など書てサキクとよめり
 さきはひ仕合サキハヒナ
 七卷四十よ福何有人香黒髪之白成左右妹之音乎聞と
 あるハドノヤウニ仕合セナ人カの意なり
 さくみ〇さぐみみアガツ、サガツ、
 二卷三十よ大鳥羽易乃山尔吾戀流妹者伊座等人之云

者石根左久見手名積來之吉雲曾無寸云六卷
五百隔山伊去割見云々廿卷
佐具久美などあるハ磐根或ハ浪間ヲアガツ、サガ
ツシテイクといふことなり。磐根を履裂て行意なりと
云説ハあらず。祝詞式も。磐根木根履佐久弥豆とあ
るも同ト。

さく オコル

六卷 十五 四良那美乃五十開田有住吉能濱十四
阿遲可麻能可多尔左久奈美比良滿尔母比毛登久毛
能可加奈思家乎於吉氏などある佐久ハ興ルといふこ

となり廿卷 十九 今替尔比佐伎母利我布奈豆湏流宇
奈波良乃宇倍尔奈美那佐伎曾祢とあるも浪勿興曾根
と云るまで同言あり。神代紀も秀起浪穗之上云くとあ
るも同ト。

さく スコトハ スヤウハ スコトラ スコトヨ

十六 寺之女餓鬼申久大神乃男餓鬼被給而其子
將播とあるハ申スコトハ或ハ申スヤウハといふ意な
り。續紀十七詔も天皇我御命尔坐申賜止申久去辰年云
云とあるも同ト。四卷 今者吾羽和備曾四二結類
氣乃緒尔念師君乎縦左久思者とある譯言ハユルスコ

トヲなり。歌意ハ、縦テして別去トしめしことを思へむ。とき
く例なり。十卷十八。相不念アモハズ。將有兒アルコ。故玉緒コニユ。長春日乎ナガキハルヒ。念オモヒ
晚久ムシクとあるハ、クラスコトヨといふ意なり。宣命オモホシ。所念オモホシ
行佐久止メサクトイリモラ詔云く。又所念オモホシ坐久止クイトイリモラ勅云く。とあるハ、オボシ
メスコトヨ。又オボシマスコトヨト仰セラレルと云意
なり。

さくも スコトモ

六卷十七。蟻往來アリガヨヒ。御覽母知師メサクモシルシ。清白濱キヨキシラビとある。譯言ハメ
スコトモなり。あびくかよひ來まして。御覽むるもこと
りなることそとの意なり。をべて。かく。けく。さく。なく。

はく。まく。らく。などの類みな同格ハタラ。用く辞ハタラ。譯言も
大低似オホヒシ。さることなり。なを各其條オノオノを考合オモヒて准知オモヒべし。
さ、めく。サ、ヤク。○
七卷三十。向峯尔カウヲニ。立有桃樹タテルモウキ。成哉等ナリヤト。人曾耳言ヒトソサメキ。為汝情勤シ。ナカコロニメ
とあるハ、サ、ヤイタといふ。同ト。土左日記異本チサ。舟
君のからく拈ヒキり出してふと思へることを。えし。誣シヒへ
とてさ、めきてやみぬ。源氏若菜ゲンジニギハヤヒ。上ウヘ。あやしくうちよ
のさまををる御さ、めきこと。もの。たのづ。あらひろ
ごりて云くなどあり。

さ、めく。ヅメキ

十六^九丁^九古部狭く寸為我哉端寸八為今日八方子等丹
五十狭尔迹哉所思而在云くとあるハ若く壯なりい
ど女どもあひまをりてさびぎいさまを云るよて
今俗よゾメキと云よあされり
さだのトリザタヒヤウバン時
十一^廿丁^廿人間守蘆垣越尔吾妹子乎相见之柄二事曾左
太多寸とあるハ世間ハトリザタヒヤウバンスルコト
多イとの意なり○十一^{廿六}丁^{廿六}奥浪邊浪之來縁左太
能浦之此左太過而後將戀可聞とあるハコノ時スギテ
の意なり

さつをリヤウシカリウド
三卷^{十八}丁^{十八}牟佐婢波木末求跡足日木乃山能佐都雄
尔相尔来鴨九卷^九丁^九木國之昔弓雄之響矢用鹿取靡坂
上尔安留弓ハ幸字有十卷^{廿九}丁^{廿九}山邊尔射去薩雄者雖
大有山尔文野尔文沙小牡鹿鳴母又^{四十}丁^{四十}山邊庭薩雄乃
祢良比恐跡小牡鹿鳴成妻之眼乎欲焉などあるハ獵師
或ハ獵人など云よ同ト
さつひとリヤウシカリウド
十卷^五丁^五佐豆人乃弓月我高荷云くとあるハ佐都雄と
云よ同ト

さつや 殺生矢

一卷 廿六 丈夫之得物矢手挿立向射流圓方波見尔清
 潔之二卷 四十 梓弓手取持而丈夫之得物矢手挿立向
 高圓山尔云六卷 十四 足引之山毛野毛御獵人得物
 矢手挾散動而有所見也卷 廿八 阿米都知乃可美乎伊
 乃里豆佐都夜奴伎都久之乃之麻乎佐之豆伊久和例波
 などあり必狩獵用ふるのみ此矢を云ざれどもその
 もと佐都と名を負せざる由ハ狩獵用ふる謂ふり得
 物と書るハその義なり
 さつゆみ 殺生弓

五卷 九 麻周羅遠乃遠刀古佐備周等都流岐多智許志
 尔刀利波枳佐都由美乎多尔伎利物知提阿迦胡麻尔志
 都久良宇知意伎波比能利提阿蘇比阿留伎斯余乃奈加
 野都祢尔阿利家留云とある佐都由美ハ殺生弓なる
 こと得物矢ハ准べし

さどふ マドフ

十八 廿六 射水河流水沫能余留弊奈美左夫流其兒尔
 比毛能緒能移都我利安比豆尔保騰里能布多理雙坐那
 呉能宇美能於伎乎布可米天左度波世流伎美我許己呂
 能須敝母須敝奈佐反歌ハ左刀妣等能見流目波豆可之

左夫流兒尔佐渡波湏伎美我美夜泥之理夫利などある
左度波世流ハマドハイツシーヤツタと云意左度波湏ハ
ドハイツシーヤルと云意なり六卷_{廿六}石上振乃尊者弱
女乃惑尔縁而云くとあるもサドヒニヨリテと訓べし
マドヒニヨツテと云意なり

さね 根カラ トテモ

九卷_{廿一}立易月重而雖不遇核不所忘面影思天とあ
るハ根カラワスレラレズと云意なり十四_十安志可
流登我毛左祢見延奈久尔十五_{廿五}夜湏久奴流欲波
佐祢奈伎母能乎十八_{廿六}與之母佐祢奈之廿卷_{十二}

登伎波佐祢奈之などある左祢も同じ十五_{廿四}安
米都知乃曾許比能宇良尔安我其等久伎美尔故布良牟
比等波左祢安良自とあるハ根カラアルマイともトテ
モアルマイと云意よもきこえと也

さねかづら○さなかづら ビナンサウ ビジンサウ フノリカヅラ

二卷_{廿七}狭根葛後毛將相等云く十一_{十一}核葛後
相夢耳受日度年經乍などあり又さなかづらと云るハ
二卷_{十一}玉匣將見圓山乃左名葛佐不寐者遂尔有勝
麻之目十卷_{五十}足引乃山佐奈葛黄變及妹尔不相哉
吾戀將居などなかり今俗よビナンサウ又ハビジン

サウ、又ハフノリカヅラなどいふものなり。

さは タクサン

一卷 十八 八隅知之、吾大王之所聞食天下尔、國者思毛

澤二雖有云くとあるハ、澤山ニアレドモと謂なり、集中

よ多き詞なり。

さび ニガクシイ

四卷 廿八 眞十鏡見不飽君尔、所贈哉旦夕尔、左備乍將

居とあるハ、ニガクシウ思フテ居ウカと云意なり、裏佐

備之味佐備ると云佐備もをと同言なり、美不始亦身平

さび メキ

ち一巻 十九 神長柄、神佐備世須登とある、神佐備ハ、俗

神様メキと云意よて、佐備ハ、そのもと然貌の約まれる

言よて、神佐備ハ、神とまして、そのふるまひを為給ふ謂

なり、翁佐備ハ、俗よ翁メキと云意よて、翁よてありな

ら、そのふるまひををる謂なり、宇麻人佐備、壯夫佐備、壯

女佐備、山佐備など云も、これよ准へて知べし、古事記よ、

勝佐備とあるも、勝ちこりたるふるまひを志とまふこ

となり。

さぶー ニガクシイ シンキナ

二卷 四十 不怜弥可念而寐良武、悔弥可念戀良武とあ

ろハニガクシウ思ウテ寐ラウカと云意或ハシンキニ
 思ウテ寐ラウカと云意なり。同卷同。樂浪之志我津子
 等何罷道之川瀬道見者不怜毛とあるハ川瀬ノ道ヲ見
 レバサテモニガクシヤと云意或ハサテモシンキナコ
 トヤと云意なり。五卷六。伊弊尔由伎豆伊可尔可阿我
 世武摩久良豆久都摩夜佐夫斯久於母保由倍斯母十五
 三十二。等保伎山世伎毛故要伎奴伊麻左良尔安布倍伎
 二丁。與之能奈伎我佐夫之佐十八十五。櫻花今曾盛等雖人
 云我波佐夫之毛伎美止之不在者などあるみれ同ト。
 さへ卷下デ。

六卷廿二。橘花者實左倍花左倍其葉左倍枝尔霜雖降
 益常葉之樹とあるハ實マデ花マデ其葉マデと云意な
 り。左倍ハもとよりあることのうへに。事の副ソバを
 いふ言なれば。集中に副并兼等の字を書き。幹ハさるも
 のよて。實花葉までと云謂なればなり。いづれも准知べ
 し。集中に多き詞なり。
 さまよひ ニヨヒ
 二卷廿五。春鳥之佐麻欲比奴礼者云。廿卷廿七。春
 鳥乃已惠乃佐麻欲比云。などある。佐麻欲比ハ俗に吟
 と云ことなり。字鏡に。喉出氣息心呻吟也。惠奈久又佐

万与不又奈介久とあり。

さむ サウ

將益ハマサウ。將成ハナサウ。將挿頭ハカガサウと云意
なり。

さむら サブゲ サブソウ

九卷ニ^三鳥鳴東國能恐耶神之三坂尔和細布乃服寒
等丹烏玉乃髮者亂而云くとあるハ俗ハサブゲニ或ハ

サブソウニと云ふ同ト。

さむらふ 伺公スル バアヒヲ見合セル 日和ヲ見合セル

大殿尔侍候御門尔侍候などやう云ハ常ハ字音ハ伺

公スルといふことよてこれハ證歌を引までもあし。○

十一^三人目多常如是耳志候者何時吾不戀有とあ

るハバアヒヲ見合せてバツカリヲレバと云ことなり。

三卷^九淡路島磯隱居而何時鴨此夜乃將明跡侍從

尔寢乃不勝宿者云く六卷^{十八}風吹者浪可將立跡伺

候尔都多乃細江尔浦隱住廿卷^四安之我知流難波

尔伎為豆由布之保尔船乎宇氣湏惠安佐奈藝尔倍牟氣

許我牟等佐毛良布等和我乎流等伎尔云くなどある佐

毛良布ハみな日和ヲ見合セルといふことなり抑さむ

らふとて令せ賜ふことあらバ奉らむと殿上ハ伺候居

るをいふがもとよて、或ハ對サキの人よりこと先立て云出
を、まち伺ひをることよも、浪風の時よるなふをまち候
ひをることよもいひて、そのもと言ハひとつなり。

さや ザアく ザワく

二卷十九 小竹之葉者、三山毛清尔、乱友、吾者、妹思、別來
礼婆とある。清ハ借字よて、佐夜佐夜と喧しく鳴動くこ
となり。俗よ ザアく、或ハ ザワくと云おごと。六卷十二
よ、足引之御山毛清落多藝都、芳野河之云く、まよ十卷八
丁よ、葦邊在、萩之葉、左夜藝、秋風之吹來、苗丹、鴈鳴渡、廿卷
四丁よ、佐左賀波乃、佐也久思毛用尔云く、古事記上卷よ、
二丁

水穂國者、伊多久佐夜藝、豆有祁理、まよ中卷神武天皇、條
よも此詞あり。日本紀よ、又伊湏氣余理比賣、命御歌よ、加
是布加牟登曾、許能波佐夜牙流など用ありて云く、
さやぐ ザアツク ザワツク
證歌上よ出。

さやの タシカ アリく ハツキリ

一卷廿九 我宿有衣乃上從朝月夜、清尔見者、拷乃穂尔、
夜之霜落云く、十二三丁よ、新治今作路、清聞鴨妹於事矣、廿
卷五丁よ、武良等里乃安佐太知伊尔之、伎美我宇倍波、左
夜加尔伎吉都於毛比之、其等久などある、左夜加ハ、
タシ

カと云意なり。或ハアリク。ハツキリなどいふ意も通
ひて聞ゆ。東齋隨筆。伏見の修理此の俊綱と聞えし
を。宇治關白殿の御子と申侍れども。さやのならぬ事か
れば。讚岐守橘の俊遠の子と定まりて。橘の姓を名乗し
あり。とあるさやのも同ト。

さやよ アリクトアザヤカニ ハツキリト

二卷 大舟之渡乃山之黄葉乃散之乱尔 妹袖清尔毛
不見云とあるハ。アリクトアザヤカニモ見エズ。或ハ
ハツキリト見エズなどいふ意なり。聖德太子御
さるく。○さるく。シヤヲノ。ザヲノ。奏麻丸天皇和

四卷 珠衣乃狭藍左謂沈家妹尔 物不語來而思金
津藻とある珠ハ。蟻字の誤にて。蟻衣なりと云る説さる
ことなり。蟻衣ハ十六も見えたり。狭藍左謂ハ。舊説。
衣の音なひのさるくとある心なりと云り。衣の音を云
るハ。詞花集。赤のひさる男の鳴ける衣をのりあま
とてねしのければよめる。和泉式部音せぬくる
き物を身よ近くなるるといふ人もありけり。源氏初
音。光もなく黒きかいねの。さるく。くちりさる
かさ。さるねりもの。うちきを着給へる。いと寒げ
心くる。とある注。さるく。くハ。さやくと鳴意あり

と見え若菜よ人くをびえさききてそよくとみしるき
 さまよふけをひども衣の音をひ耳のいましき心ちを
 とも見えより左謂くくハ俗又シヤヲくガラくると鳴
 といふ意よて枕詞よりハ衣のをれあひて鳴音のシヤ
 ヲくと云意よいひのけうけさるるをよてて家妻がさ
 をくと喧しく擾ぎ立をたつめて出来し謂ちり十
 四サ三又安利伎奴乃佐惠くく之豆美云くと出さるこ
 れも同ト
 〇此部ある程ハ難字の類ハ又難字さしと云ふ語ちと
 一四夕イイシイハ難字の類ハ又難字さしと云ふ語ちと

來之ハ來々行志ハ行々所見志ハ三エ夕為志ハ為夕と
 云意なり。〇寒志ハサブイ痛志ハイ夕いと云意なり。〇
 戀志ハコイシイ權志ハウレシイ悲志ハカナシイ苦志
 ハクルシイと云意なり。
 一かをがよシカシナガラニサレドモ
 四卷丁三又安蘇く二破且者知雖之加須我仁黙得不在
 者云くとあるハシカシナガラニダマツテヨウアラ子
 バ或ハサレドモダマツテヨウアラ子バと云意なり。五
 卷丁十五又烏梅能波奈知良久波伊豆久志可須我尔許能
 紀能夜麻尔由企波布理都く十卷丁八又山際尔雪者零管

然為我シカスガニ二此河揚波コノカハヤギハ毛延モエニ尔家留ニケルカ可聞カモ又又見雪者ユキミレバ未冬有イダユナリ
 然為蟹シカスガニ春霞立ハルカスミタチウメ梅者散ハナチツク乍丁十六十六美之ミシ麻野尔マノニ可須美カスミ
 多奈妣タナヒ伎之キシ可須我尔カスガニ伎乃敷キノフ毛家布毛モケフモ由伎波敷里都追ユキハフリツ
 廿卷五十七都奇餘米婆ツキヨメバ伊麻太冬イマダフユ奈里之ナリシ可須我尔カスガニ霞多カスミタ
 奈婢久波流多知奴等ナヒクハルダチヌト可後撰集カノチリツクまどろまぬ物あらう
 とてあををのようつよもあらぬ心ちのみをる新古
 今集よ能因法師かくしつゝ暮ぬる秋と老ぬればあ
 をのよなるもの悲しき後拾遺集よあををのよの
 了よてよめる能因法師思ふ人有となけきどふる里ハ
 あををのよこそ悲しうけき現存六帖よかりあをを

花をそまよぬあををのよ鳴てようれぬ春はなけれど
 などあるみれ同ハナハナ
 一のソレガ
 五卷廿九愛久志我ウシクシガ可多良倍婆カタラヘバ十八十八一之我願心イチノシガカフココロ
 太良比タラヒ尔ニ十九十九一一鷗河立取左牟安由能ウカハタテトラサムアユノ之我波多波シガハタハ
 又又廿七廿七黄楊小櫛之ウツダグシノ賀左志家良之ガサシケラシ又又廿九廿九秋花之我色アキハナシガイロク
 二などあるハ其之と云意なり古事記仁徳天皇大后御
 歌よ佐斯夫能紀斯賀斯多迹サシブノキシガシタニオヒ於斐陀オヒダ互流波毘吕タテルハヒロ由都麻ユツマ
 都婆岐斯賀波那能互理伊麻斯芝賀波能比吕理伊麻須ツバキシガハナノテリイマシシバガハノヒロリイマス
 波又同條歌よ加良奴袁志本尔夜岐斯賀阿麻理許登尔ハカラヌマシホニヤキシガアマリコトニ

都久理清寧天皇條歌_二斯毘都久阿麻余斯賀阿禮婆日_一
本紀雄畧天皇卷歌_二志我都矩屢麻泥尔_一ま_二旨我那誓_一
摩續紀廿一詔_二仕奉人等中尔_一自何仕奉狀隨_二豆廿五詔_一
_二先仁之我奏之事方_一などある皆同ト

一のタ
在志可ハアツタ取志可ハトツタ極志可ハハテタと云
意なり

一のサヤウ
一卷_二古昔母然尔有許曾とあるハ_一サヤウデアレ
バコソ或ハサウアレバユソと云意なり同卷_二十三_一三

輪山乎然毛隱賀雲谷裳情有南畝可苦佐布倍思哉とあ
るも同ト集中_二多_一
一のばかりソレホド
四卷_二宇波弊無物可聞人者_一然許速家路乎令還念
者とあるハソレホドと云意なり

一のオヨバズ
三卷_二默然居而賢良為者飲酒而醉泣為尔尚不如_一
來六卷_二隼人乃湍門乃磐母年魚走芳野之瀧尔尚_一
不及家里などあるハマダオヨバナワイと云意なりハ
卷_二三十八_一丁_二五十七_一丁_二も尚不如家里_一十二_二十八_一丁_二も猶不如家利_一

なとあるみれ同く九卷丁 廿二今日尔何如將及筑波嶺
昔人之將來其日毛とあるハドウシテオヨバウゾと云
意なり同卷丁 卅四錦綾之中尔褱有齋兒毛妹尔將及哉
云くとあるもオヨバウカイと云意なり
一のとあらぬハカぐシカラヌ

五卷丁 廿九志可登阿良農比宜可伎撫而云くとあるハ
今俗ハカぐシカラヌと云意なるべし

重而零重而念などいふ之伎ハカサ子ぐといふことか
り零敷發布などいふ之久も同言あり六卷丁 十五邊津

カサ子ぐ

浪之益敷布尔十七丁 卅安我毛布伎美波思久々於毛
保由又丁 卅四伊夜思久々丁 卅尔伊尔之弊於毛保由カサ子と疊
ても云ること多しみ如同言なり

十三丁 十四刺將燒少屋之四忌屋尔云く搔將折鬼之四
忌手指易而將宿君故云くとある四忌ハ志許と云よ
同上説下よ出屯

戀之伎ハコヒシイコヒシイ懽之伎ハウレシイウレシイ悲之伎ハカナシ
イといふ意なり之氣禮といふも許曾のかゝりコソの結ヒの

異れるのみよて、譯言の同じことなり。

と、タトキ、タコト

七卷十三、住吉之名兒之濱邊、馬並而玉拾之久、常不

所忘ラエズとあるハ、玉ヲ拾ウタトキノオモシロカ、ツタコト

ガ、フダンワスレラズと云ことなり、同卷四十、吾背

子乎、何處行目跡、辟竹之背、向尔宿之久、今思悔裳とある

と、ウシロムキニ宿タコトガ、今更後悔ギヤと云ことか

四卷五十、夜之穗、杼呂吾出而來者、吾妹子之念、有四

九四面影、二三湯八卷四十、秋野之草花、我未采、押靡而

來之久、毛知久相流、君可聞九卷十五、欲見來之久、毛知

久吉野川音清、左見二友敷十卷卅一、天漢渡湍、每思乍

來之雲、知師逢有久念者、などある、みち同く、をへて之久

を、當昔ありしことを、今いふ詞なり、古事記應神天皇、條

歌、泥斯久遠、斯叙母と云る、斯久も同く、日本紀神武天

皇、卷、抑又聞於鹽土老翁、曰云く、この聞曰をキヘシク、

イヒシクとよめりも同意よて、キイタトキ、イフタトキ、

イフタコトカといふことなり、又續紀十七、詔、朕宣自

久云く、止宣比之、廿卷、詔、屢詔志久云く、止詔伎、廿四、詔

朕、爾告之久云く、止宣、豆此政行、給岐、廿五、詔、然之、我

奏之久云く、止奏之、可止毛、ま朕、爾勅之久云く、止勅、岐

三十詔よ。朕我天乃御門帝皇我御命以天勅之久云云。止命天。朕尔勅之久云云。止命伎復勅之久云云。止勅比之御命乎。不忘など見えざる。これ之形同格なり。

一くシウイハレシウ。悲之久ハカナシウ。樂之久ハタノシウ。恨之久ハウラメシウ。苦之久ハクルシウ。といふことなり。

一ぐひグハヒ。シツクリ。十六。十六。美麗物何所不飽矣。坂門等之角乃布久礼尔四具比相尔計六とあるハ。グハヒヨウ逢夕。或ハシツク

リアウ夕。といふ意よもきこえざり。

一げ。サイチウ。十九。十六。敷治奈美乃志氣里波須疑奴。安志比紀乃夜麻保登等藝須奈騰可伎奈賀奴とあるハ。サイチウハスギタと云意なり。

一こヘゴ。十七。五。之許都於吉奈とあるハ。ヘゴナ老人といふことあり。四卷。五。十二。等。志許草とあるも。ヘゴ草といふことあり。八卷。志許霍公鳥とあるも。ヘゴホト、ギスといふことあり。十三。鬼之四忌手と

あるも同トク、醜之醜手と重く罵さるあり、古事記も黄泉志許賣、日本紀も不須也凶目など見えたる志許も同

一こり シソコナヒ

十二^四、我背子之、將來跡語之、夜者過去思咲八更、思許理來目八面とある、思許理ハ失計と云も同ト、中昔物語文も志をこなひとることを志、さらあまといへるも同言あり、歌意ハ男ハ必來ウトヤクソクシタ夜サヘモ來イデムヤクニスギタカラハ、マシテヤクソクセヌ夜ハ來ベキハズガナケレバ、今更待タゾト云テモ、來ソ

コカヒニモ來ウカイトテモ來ハスマイとなり。

一あび〇一あべる イロノテリクトシタ

十卷^{五十}、金山舌日下、鳴鳥音聞何嘆とあるハ、イロノテリクトシタソノ下ニ、といふことなり、二卷^{四十}、秋山下部留妹、奈用竹乃、騰遠依子等者、云くとあるも、秋山の紅葉ノ色ノヤウニ、テリクトシタミメノヨイ女と云なり。

一多 ナイシヤウ ウチ

下戀^{シタコヒ}下問^{シタドヒ}などいふ志多ハ、ナイシヤウのことなり、〇二卷^{廿七}、王者神西座者、天雲之、五百重之下、尔隱賜奴と

ある下ハ裏といふ意あり。...

九卷 丁 廿六 完串呂黄泉尔将待跡隱沼乃下延置而打歎

妹之去者云々十四 丁 廿七 安思我良乃美佐可加思古美久

毛利欲能阿我志多婆倍乎許知氏都流可母十八十八

佐由利花由利母相等之多波布流許己呂之奈久波今日

母倍米夜母古事記仁德天皇條歌よ許母理豆能志多用

波閑都々とも見えとりみれナイシヤウニ思ヒ置と云

意あり。

一多いふかトみヤドウカト...

十一 丁 廿三 眉根搔下言借見思有尔去家人乎相見鶴鴨

とあるハドウカト思フタニと云意なり。

一づく〇みづく水ニツカル

七卷 丁 卅一 海底沉白玉風吹而海者雖荒不取者不止又

同底清沉有玉乎欲見千遍曾告之潜為白水郎又同大海

之水底照之石着玉齋而將採風莫吹行年又同水底尔沉

白玉誰故心盡而吾不念尔などある之豆久ハみれ水ニ

ツカルといふことなり又廿卷 丁 廿二 知く波く江已波比

豆麻多祢豆久志奈流美豆久白玉等里豆久麻豆尔十八

丁 卅一 海行者美都久屍山行者草牟湏屍云々などある

美豆ミヅ久クも同ト、

一ふろ ムリニ ムリヤリニ

三卷十三 不聽イナト跡ト雖イヘド云ド強流シレル志シヒ斐ノ能ガ我シヒ強語ガク比ゴ者カ不聞ズ而テ

朕アレ戀コヒ尔ニ家ケ里リ又イナト不聽イヘド雖イヘド謂イハレ話カ礼レ常カク詔ノ許ラセ曾コソ志シヒ斐ノ伊イ者ハ奏マツ

強話シヒ登言ガクなどある強流シレルハ俗シムリニ或シハムリヤリニ

などいふも同ト、

一ぬ シナヤギ

三卷十八 淡海アヲ乃ノ海ミ夕浪チラ千鳥チドリ汝鳴カケ者バ情モ思努シヌ尔ニ古所イシ

念ホユとあるハ心モ靡シナヤイイ古コガオモハハルルと云意イなり

思努シヌといふ言の意を按アふハまづ十卷五十 秋穂アキホ乎フ之シ

努ヌ尔ニ押オシ靡ナベ置オク露ツユ云クとあるハ發オク起チとる稻穂イネホを裏シタ押オシ

ふせ靡ナベのせて露ツユの甚シく置オクとる形容ケガレを云クとるなりされ

む思努シヌハ靡シナふ義イよて發起ウラの對ツラなり心ココロよ云クも心の發起ウラ

ず裏ウラよのみ思ふよハなりその裏ウラよ思ふハ真マコトの極キマまり

とるよハよて心の裏ウラより思ふ意イなり摠スベてハをハをつ

くろひハらざりて物モノをハる事コトハ心裏ウラの真偽マコトハ志ココロられぬを

心裏ウラより思ふ事コトハハとまれ真マコトの極キマまりとるも

のなりされバ心ココロも靡シナやぎて真マコトよ志ココロる思ふよハよて心

も思努シヌよ思シハるハとハいふなりハ思シふと云クもやハて此

詞コトバの用ヨウきとるものなり八卷三十 暮月夜クツキヨ心ココロ毛モ思努シヌ尔ニ

白露乃置此庭尔。蟋蟀鳴毛。十一。十四。海原之奥津繩乘。
打靡心裳。四努尔。所念鴨。十三。借薦之心。文小竹荷人。
不知本名曾戀流。此一首よて心裏は十七。安良
多麻乃登之。可弊流麻泥安比見祢婆。許己呂母之努尔。於
母保由流香聞。ま。保登等藝。須奈伎之等與米婆。宇
知奈妣久許己呂毛之努尔。曾己乎之母。宇良胡非之美等。
ま。久毛為奈須己許呂毛之努尔。多都奇理能於毛。
比須具佐受十九。夜具多知尔。寢覺而居者。河瀬尋情。
毛之奴尔。鳴知等理賀毛。廿卷。宇梅能波奈香乎加。
具波之美等。保家杼母己許呂母之努尔。伎美乎之曾於毛。

布などあるみれ。一意あり。身未片。之。橋。與。音。等。來。
ぬふ。コヒシタフ。シノビカクレル。コラヘル。シヤウクワンスル。
一卷。山越乃。風乎時自見。寐夜不落。家在妹乎懸。而小
竹櫃とあるハ。家ニトゞメテオイタ女房ヲ。心ニ懸テ戀
シタウタといふ意なり。此例ハ甚多。一。十一。秋
柏潤和川邊細竹目人。不顔面。公無勝とあるハ。人目ヲシ
ノビカクレルカラ。アフコトノナラヌニヨツテ。君ヲ戀
シウ思フ心ガ。タヘラレヌと云意なり。此も多。一。十二
十六。梓弓引而不縱。丈夫哉。戀云物乎。忍不得牟とある
ハ。ヨウタヘコラヘウカイと云意なり。一。卷。十二。黄

葉乎婆取而曾思奴布云くとあるハトツテヤウクワ
 ンスルチヤと云意なり。七卷十三。墨吉之岸尔家欲得
 奥尔邊尔縁白浪見乍將悞十六。布势能宇美能意
 枳都之良奈美安利我欲比伊夜登悞能波尔見都追思努
 播牟又四曾己乎之毛安夜尔登母志美之怒比都追安
 蘇夫佐香理乎云々十八。百鳥能來居互奈久許惠
 春佐礼婆伎吉能可奈之母伊豆礼乎可和枳互之努波無
 云く又十九由具敝奈久安理和多流登毛保等登藝湏奈
 枳之和多良婆可久夜思努波牟十九。耳尔聞眼尔
 視其等尔宇知歎之奈要宇良夫礼之努比都追有争波之

尔云く又十六每年尔來喧毛能由惠霍公鳥聞婆之努波
 久不相日乎於保美又十九霍公鳥云く里響鳴渡礼騰母
 尚之奴波由又廿安里我欲比見都追思努波米此布势能
 海乎廿卷十四。八千種尔久佐奇乎宇惠互等伎其等尔
 左加牟波奈乎之見都追思努波奈又四安治佐為能夜
 敝佐久其等久夜都與尔乎伊麻世和我勢故美都く思努
 波牟これらみれ同意なり。
 一巻廿。潮左為二五十良兒乃島邊榜船荷妹乘良六鹿
 荒島回乎とあるハ潮のみちくる時左為くと鳴を

云三卷三十九塩左為能浪乎恐美云十一六三十牛窓
之浪乃塩左猪島響所依之君尔不相鴨將有十五廿八
於伎都志保佐為多可久多知伎奴廿ある皆同ト潮左
為ハ潮動の縮れるなりと説和伎切為となきり

しまみ 島ノメグラ

一卷廿一潮左為二五十良兒乃島邊榜船荷妹乘良六鹿
荒島回乎十七廿六柰藝左尔波安遲牟良佐和伎之麻
未尔波許奴礼波柰左吉云廿卷廿四春霞之麻未尔
多知豆多頭我祿乃悲鳴婆云くなど見えとり此等の假
字書よよりて島回とあるをばいづくよてもしまみと

訓べきこと浦回磯回の例れごとく

しまみする しまみハリスル

六卷十八玉藻刈辛荷乃島尔島回為流水鳥二四毛有
哉家不念有六とあるハ島マハリシテ求食ルとの謂る
已七卷十八島回為等磯尔見之花風吹而波者雖縁不取
不止又十五塩干者共滷尔出鳴鶴之音遠放島回為等霜
などあるみれ同ト

しまさび フルメキ

一卷廿三日本乃青香具山者日經乃大御門尔青山跡
之美佐備立有云くとあるハフルメイテ立テ居ルとの

謂なり。

し、み、し、ゲウ

十、卷、丁 卅七 遺居而戀管不有者追及武道之阿回尔標結

二、家、里、と、ある、ハ、枝、毛、繁、ウ、ニ、の、意、なり。

し、み、ら、〇、し、め、ら、日、ガ、ナ、一、ツ、チ、日

十三、丁 十四 赤根刺畫者終尔野干玉之夜者須柄尔云く。

又、丁 卅七 赤根刺日者之弥良尔十七今日毛之賣良

尔、丁 十五 畫者之賣良尔などあるハ、皆俗よ、日、ガ、ナ

イ、ツ、チ、ニ、チ、と、云、意、なり。

し、め、を、も、ト、ク、ト、ニ、セ、ル

三、卷、丁 卅 吾妹兒二猪名野者令見都名次山角松原何時

可、將、示、と、ある、ハ、何、時、カ、ト、タ、ト、見、セ、ウ、と、の、意、なり、九、卷

見、セ、被、成、タ、レ、バ、と、云、意、なり、三、卷、丁 卅 家妹之濱畏乞

者、何、矣、示、四、卷、丁 五十 君尔吾戀情示左祢などあるもみ

な、そ、の、意、なり。

し、め、ハ、ウ、ジ

二、卷、丁 十五 遺居而戀管不有者追及武道之阿回尔標結

吾、勢、七、卷、丁 卅三 葛城乃高間草野早知而標指益乎今悔

拭、十、卷、丁 卅六 吾屋外尔殖生有秋芽子乎誰標刺吾尔下

古言譯通夏

所知チズなどあるハ、ハウジヲサスと云ことなり。二卷廿三
 如カ是有ラ刀ト豫知カチテシ勢婆セバ大御船オホミフネ泊フキテ之シ登ト万里人マンリニ標結シメユ麻思マシ乎ヲ
 とあるも、ハウジヲユウテ、永代留トクメ奉タテマツツ、テ他ホカへ御出
 不被遊レ様ニ、為ベキコトデアツタモノヂヤニといふ意
 なり。十八廿二大伴能オホトモノ等保追トホツカム可牟カム於夜能オノヤノ於久都奇波オクツキハ
 之流シル久之米クシメ多底タテ比登能ヒトノ之流シル倍久バクとあるを、ハウジヲタ
 テヨといふなり。又之米シメ延ハフとあるハ、標繩シメナハを延ハフることな
 べ。
 一むる 吾物ニスル 領分ニスル 具サヤウの意なり。七卷
 七卷廿三 於君キミニ似ニル草登見クサトミシ從我標アガシメ之野山ノヤマ之淺茅ノアサチ人莫ヒトナ刈カリ

根ネ又又三島江シマエ之玉江ノタマエ之薦ノコモ乎ヲ從標シメ之己オノ我跡ガトソ曾念モフ雖未イナカ
 新チトらどある標シメ之ハ、吾物ニシタ、或ハ領分ニシタといふ
 意なり。十九廿安乎アヲ尔與ニヨシ之奈良比ナラヒ等美牟登トム和我世故ワガセコ
 我ガ之米家牟毛美知シメケムモミチ都知尔トチニ於知米也母チメヤモとある之米家牟シメケム
 也、吾物ニシタデアラウ、或ハ領分ニシタデアラウとい
 ふ意なり。
 一らせとのみのり カツテニセヨトノ御掟
 十六廿二 商變領アキガヒシラセト為跡之御法ノミノリアラバ有者許曾アカシタコロモウシタマ
 とあるハ、商變アキガヒヲカツテニセヨトノ御掟アラバコソの
 意なり。

しりぶり ウシロツキ

十八 丁 廿六 左刀妣等能見流目波豆可之左夫流兒尔佐

渡波湏伎美我美夜泥之理夫利とあるハ宮出スルウシ

口ツキと云るなり。

しるし 前表 トクブン セン ドウリ

四卷 丁 廿二 劔太刀身尔取副常夢見津何知之惟曾毛君

尔相為とあるハ何ノ前表ゾヤと云意なり十九 丁 廿九

從古昔无利之瑞多碑末祢久申多麻比奴とある瑞も同

又十七 丁 十四 新年乃波自米尔豊之登之思流湏登奈

良思雪能敷礼流波允恭天皇紀歌 和餓勢故餓句倍枳

豫臂奈利佐瑳餓泥能區茂能於虚奈比虚豫比辞流辞毛

續紀九卷詔 大瑞物顯來理云々今將嗣坐御世名乎記

而應來顯來留物尔有良志止所念坐而云々これらも皆

思流志てふ言のむとらきとるものよて同ト 〇一卷 五 廿

丁 引馬野尔仁保布榛原入乱衣尔保波勢多鼻能知師

尔とあるハシンキナ旅ヲシタトクブンニといふ意な

四卷 丁 四十 雖念知僧裳無跡知物乎奈何幾許吾戀渡

とあるハ戀シウ思ウテモソノセンモナイト云コトハ

知ッテ居ルノヂヤニと云意なり 〇四卷 丁 廿四 幼婦常言

雲知久手小童之哭耳泣管云々とあるハ小女郎トイフ

コトモドウリと云意なり。六卷丁十七。蟻往來御覽母知アリカヨヒメサクモシル
師清白濱とあるハ。サイく御出被遊テ。ゴランジルモド
ウリゾと云意なり。

ろくなき センノナイ ヤクニタ、又

三卷丁卅一。驗無物乎不念者。一坏乃濁酒乎。可飲有師。十

一丁廿二。驗無戀毛為鹿。暮去者。人之手枕而將寢。兒故。又

五丁五。麗玉五年。雖經吾戀。跡無戀。不止恠。などあるハ。センノ

ナイ。或ハヤクニタ、又などいふ意なり。

ろカハリ。大蘇。贈來野云。今。神。國。坐。嗚。世。子。登。踏。

八卷五丁五。棚霧合。雪毛零奴可。梅花不開之代。尔曾倍而

谷將見とあるハ。開又ガカハリニの意なり。拾遺集。物
名なむむし。鶯の鳴む代シロハ吾を鳴花のまほひやあ
むしとまると。

一急やヨシヤ エイハ

四卷丁四十。豫人事繁如是。有者四惠也。吾背子。與裳何如

荒海藻とある四惠也。假リ縦を辞して。ヨシヤ。或ハエ

イハと云意なり。此歌意ハ。ハシぐイヒ始。タバカリテ。マ

タ事成就セヌノニ。ハマヘカドヨリ。人ニザンゲンセ

ラレルコトヨ。カヤウデハ。行末モイカバ。アラウトキツ

カハシイコトゾ。エイハ御マヘヨ。タトヒ人言ハシゲウ

アラウズトモソレニカマハズシテアフウとなり。十卷
十七、春山之馬酔花之不惡公尔波思惠也。所因友好。又
廿六、秋芽子戀不盡跡。雖念思惠也。安多良思。又將相八方。
十一、奥山之真木乃板戸乎。押開思惠也。出來祢後
者何將為。十二、我背子之將來跡語之。夜者過去。思咲
八更、思許理來目八面。などあるみな同ト。

○す部

す
八卷、吾君尔戲奴者戀良思。給有茅花乎。雖喫弥瘦
尔夜須とあるハ。俗ニヤセルといふ意なり。走をハセル

浅をアセルといふ類も。皆其定なり。又令見令知らど云
類をも。俗ニミセルシラセルと云也。

す
五卷、許之伎尔波久毛能須可伎豆飯炊事毛和須礼
豆云くとあるハ。蛛ガ巢ツクツテといふ意なり。

す
十七、情尔波由流布許等奈久。須加能夜麻須可奈
久能未也。孤悲和多利奈牟とあるハ。ニガクシウ。或ハク
ニシテの意なり。

すがら
ヨヒトヨ

十三^{十四} 赤根刺畫者終尔野干玉之夜者須柄尔云く
又^一 赤根刺日者之弥良尔烏玉之夜者酢辛二云くな
どあるハヨヒトヨと云ことなり。

すけき スキ

十一^三 玉垂小簾之寸鷄吉仁入通來根足乳根之母我
問者風跡將申とあるハ簾の透間のことなり。

すゝしきほふ ワレサキニトアラソフ

九卷^五 智奴壯士宇奈比壯士乃廬八燎須酒師競相
結婚為家類時者云くとあるハワレサキニトアラソフ
テと謂なり。

すそみ フモトハリ

九卷^三 筑波嶺乃須蘇廻乃田井尔秋田苺妹許將遣
黄葉手折奈とあるハフモトハリといふことなり十

七^四 二上山賦 二須賣加未能須蘇未乃夜麻能云と

とあるハ二上山のフモトハリノ山といふなり廿卷
十五^二 多可麻刀能宮乃須蘇未乃努都可佐尔伊麻左家
流良武乎美奈弊之波母とあるも同ト。

すだく タカル

七卷^{十五} 夏麻引海上酒乃奥津洲尔鳥者篲竹跡君者
音文不為十一^{十四} 葦鴨之多集池水雖溢儲溝方尔吾

將越^{コエノヤ}八方^モなどあるハ、常^ト々^トカルといふも同ト。

すでに ^一チメン ^ノコリナウ

十二^{十六} ^丁十六^二。梓弓^{フツサキ}引見^ニ縦見^ニ思見^ニ而^テ既^ス心^ニ齒^ハ因^リ尔^ノ思^ハ物^ノ乎^ナと

あるハ、ト^ツツ^ツオイ^ツサ^テぐ思^ヒタ^メシ^テ見^テツ^ヒニ

ノ^コリ^ナウ^心ハ^ヨツ^タモ^ノチ^ヤニ^と云^意なり。十七^三

丁^二。天下^{アマタ}須^ス泥^デ尔^ニ於^オ保^ホ比^ヒ底^デ布^フ流^ル雪^{ユキ}乃^ノ比^ヒ加^カ里^リ乎^ハ見^ミ礼^レ婆^バ多^タ

敷^フ刀^ト久^ク母^モ安^{アル}流^ル香^カとあるハ、天下^一チメン^ニ覆^フテ^{フル}雪

ノと云^謂なり。古^事記^上卷^二。此^葦原^中國^者。隨^命既^獻也。

日本^紀繼^體天^皇卷^二ハ、全^字を^スデ^ニと^訓フ。其^意なり。

按^レ。既^字を^スデ^ニと^訓ときハ、字^書盡^也と^注し^とる

意^{なり}。既^往の^義ハ^なき^みよ^りて、既^往の^こと^をス^デニ

と^云と^るこ^と。古^よハ^さら^よる^トカ^ハ既^已也^と注^しと

る^ときハ、ハ^ヤク^と訓^ベト^スデ^ニと^ハ訓^ベら^ず。去^ら

る^を此^字を^後ハ^スデ^ニの^み訓^て。既^往の^意ハ^云こ

と[、]意^得て^スデ^ニと^云ハ、盡^字の^意な^るこ^とを^知ら^る

人^をく^あし。

す^なは^ち ^スグ^サテ ^ソク^ガ

八^卷 ^丁三十^二。霍^{ホト}公^{キス}鳥^{トキ}鳴^シ之^ス登^ノ時^{キミ}君^ガ之^イ家^ニ尔^ニ往^テ跡^ト追^ヒ者^ハ將^イ至^{ケル}鴨

と^ある^ハ。ス^グサ^テとい^ふ意^{なり}。續^紀十^七詔^二。河^内國

大^懸郡^乃智^識寺^尔坐^ニ。盧^舎那^佛遠^禮奉^天則^朕毛^欲奉^造

止思登毛云くとあるも同上六帖に貫之春多むを
そちごとよ君がとめ千年つむべき若菜ちりけり竹取
物語に綱を曳過して綱とゆるをなちやしまのかな
への上よのけさまおち給へり宇都保物語鶴子より
まれ給ひしをなちより御ふところをれち奉り給を
ば濱松中納言物語に御せうをこつとへ給ひつるをか
へしまうでしをれそちもえとづぬ出上奉らば落窪
物語よこの少將を見いでぬるをれそち北の方れと
よ申給ふ蜻蛉日記に此除目のとくよやと思給へし
ををれそちもきこえさをべりしを源氏物語寄生よ

るざとめしとハ侍らざしとど例ならむゆるさせ給
へりしよろこびよをなちもまをらまをく侍りし
を枕冊子に里よてもあくろをなちこれに大事よ
て見せよやろ大和物語よみづのら只今まをりてと
むいひとりけるのくてをなち來よけり云くなど物
語文よなち多く見えていづれも用へるさま同上趣
又ソクザと譯して宜しき所もあり

すべ シミチ セン方

四卷 廿二 吾背子尔復者不相香常思墓今朝別之為便
無有都流又 廿五 古人之令食有吉備能酒病者為便無貫

篔賜年スミラムなどある也。シミチ或ハセン方などいふがごと
し。集中スミラムは多き詞なり。

すまざハ スマウヨリハ

八卷三十一事繁里尔不住者トシキサニスズバハ今朝鳴之鴈尔副而去益物ケサナキシカリニタガヒテユカシモ
乎とあるハ住ウヨリハの意あり。

すみれ スモトリグサ

スモトリバナ

八卷十五春野尔湏美礼採尔等ハルスニスミレツニトコシアレツヌラナツカ來師吾曾野乎奈都可
之美一夜宿二來シミヒトヨチニケルなわあり。湏美礼ハ今俗スミレハ今俗スモトリグサ又ハスモトリバナとも呼ツズ。これを都保湏美礼とも
よめる。都保ツホハいかなる意ツホありあらむ。

すら

サヘ

マデ

ヤツパリ

三卷四十輕池之カルイケノ洑回往轉留ウラミモトホル鴨尚尔カモスラモ玉藻乃於丹獨宿タマモノウヘニヒトリ

名久二ナクニハハ毛字の誤ハハモジノミヤなるべし。とあるハ鴨カモデサヘモ。又

鴨カモマデモ。又鴨カモデモヤツパリヤツパリなどいふ意なり。人ハさる

ものよて。鳥までもと云意あり。集中スミラムは甚多き詞なり。い

づれも此コノハ准へて意得べし。からぶみカラブミ。堯舜タウセン其猶病諸ミヤウシ

と訓も。常人ハさるものよて。堯舜タウセンまでも病ヤ志シと云

意よて。湏良スミラと猶ナドとその意通へり。尚ナド字ハ猶也とも加也

とも云る意をとれるなり。古今集コノよりこなと云。湏良スミラと

云べき所をも。陀尔ダニとのみ云り。されバ湏良スミラと云べき所

を陀^ダと云ふこともなし。佐^サ敝^ヘといふべきを陀^ダと云
ハ誤るり。をべて須^ス良^ラ陀^ダ尔^ニ佐^サ敝^ヘの辞^ジ用^{ヨウ}ひざまを誤る
こと。初學の人^ニ多^クし。よく古歌^ニ考^{カウ}合^{カウ}せて用^{ヨウ}ふべきこ
となり。

する○すれセル

知^{シラ}須^{スル}流^ルハシラセルといふ意見^ニ見^ミ須^{スル}流^ルハミセルといふ意
なり。須^ス礼^レも許^コ曾^{ソウ}のか、^レの結^キび詞^ジの異^イなるのみよて。
譯言^ニハ同^{ドウ}じことあり。

○せ部

せず 被^レ成^ル

一^一卷^ノ十七^ノは安^ヤ見^ミ知^シ之^ヲ吾^ワ大^オ王^{ホキミ}神^{カミ}長^{ナガ}柄^{カラ}神^{カミ}佐^サ備^ビ世^セ須^ス登^ト云^ク。
とある。世^セ須^スハ爲^スの伸^ノじとる詞^ノ爲^レ賜^ヲふと云^フ意^ニよて。俗^ノ
被^レ成^ルと云^フあされり。多^クき詞^ノなり。後^ノくまハこの用^ノ様^ノ絶^ト
とり。

せずハ セウヨリハ

五^五卷^ノ廿^ニ二^ノは於^オ久^ク礼^レ爲^レ天^テ那^ナ我^ガ古^コ飛^ヒ世^セ殊^ズ波^ハ弥^ミ曾^{ソウ}能^ノ不^フ乃^ノ于^ウ
梅^メ能^ノ波^ハ奈^ナ尔^ニ母^モ奈^ナ良^ラ麻^マ之^シ母^モ能^ノ乎^ヲとあるハ。長^チ戀^{コイ}ヲセウヨ
リハの意^ニなり。

せハ 一^一パイニ

八^八卷^ノ十五^ノは山^{ヤマ}毛^モ世^セ尔^ニ咲^{サケル}有^{アル}馬^{ウマ}醉^{シビ}木^ノ乃^ノ不^フ惡^{カラス}君^{キミ}乎^ヲ何^イ時^{ツキ}往^{ユキ}而^テ

三卷四十五丁 名湯竹乃云く天雲乃曾久敝能極云くとあ
るハ、イキツマツタ處ノハテと云意なり十七廿四山
河乃曾伎敝乎登保美とあるも、イキツマリガ遠サニと
云意よて同ト四卷廿五一、天雲乃遠隔乃極九卷卅三一、
天雲乃退部乃限十九七十三一、曾伎敝能伎波美など有み
な同ト曾久ハ、曾伎曾許などいふよ相通ひ、敝ハ方よて
底方なり、本居氏底とハ、上小まれ下小まれ横よるれ、至
り極る處を何方よても云り、十五三十四一、安米都知乃曾
許比能宇良尔とあるを以て、天よも云べきことを知べ
し、又六卷二十五丁 藤原宇合卿西海道節度使よ罷らるゝの

ときの高橋虫麻呂の長歌又筑紫尔至山乃曾伎野之衣
寸見世常伴部乎班遣之とある、曾伎も極みを云て同ト
ことあり、又塞を曾許と訓も、境域の極界の地なる謂ぞ
と云也。

そこらく○そきだく○そこば
九卷十八一、此篋開勿勤常曾己良久尔堅目師事乎云く
とあるハ、メツソウカタウニヤクソクシタコトヂヤニ
の意なり、廿卷廿五一、難波の海のさまを曾伎太久毛於
藝呂奈伎可毛己伎婆久母由多氣伎可毛とあるハ、メツ
ソウ海上ガ廣ウテハテノナイコトカナとむツモリシ

レズ海上が廣ウテハテノナイコトカナとも通ぬ。十七
三丁。二上山を可牟加良夜曾許婆多數刀伎とあるも。
四丁。メ、ツソウ貴イとも。ツモリシレズ貴イともきくべし。
そども。ヒウラ

一卷。二。耳無之。青菅山者背友乃大御門尔。宜名倍神
佐備立有云くとある。是ハ耳無ハ北の御門に當レバ云
るなり。成務天皇紀。山陽曰影面山陰曰背面と見えと
影面ハ俗云日オモテ背面ハ俗云日ウラなり。狭くハ
一家よても云廣くハ天下よ亘りても云り。二卷。三丁。八
隅知之吾大王乃所聞見為背友乃國之真木立不破山

越而云くとあるハ美濃國を指て云り。美濃ハ東山道な
れど。皇城よりハ北東よあるべけれハ背面國と云る
るるべし。

そのひ。其日カラ。四卷。四十丁。吾背子乎。相見之。其日至乎今日。吾衣手者乾
時毛奈志とあるハ。其日カラ今日ニテニといふ意あり。
そのひれきはみ。其日カラコノ方

四卷。三十丁。真十鏡磨師情乎。縦手師其日之極。云くとあ
るハ。其日カラ己來と云意あり。
そへ。ヨソへ

八卷 五十 五丁 下。棚霧合。雪毛零奴可。梅花不開之代尔。曾倍而
谷將見とあるハ。マダ開ヌ花ノカハリニヨソヘテの意
あり。

そほふる シヨボクフル

十九 廿九 丁 下。伊夜彦於能禮神佐備青雲乃田名引日須良。
霖曾保零とあるハ。シヨボクフルと云意なり。古今集題
詞。三月の朔日より竊人小物ら云て後。雨のそを
ふりける。作て遣ける。後撰集題詞。八月中の十日
許。雨のそをふりける日云。新古今集。春雨のそを
ふる空のをやみせず。たつる涙。花を散ける。

そよ ソヨクザワク

十卷 廿二 丁 下。旗荒木末葉裳曾與尔。このところ舊本よ十
二 六 丁 下。布妙之枕毛曾世二嘆鶴鴨新撰万葉。松葉牟曾
與丹吹風者などあり。廿卷 卅四 丁 下。波呂くく尔。伊弊乎於
毛比塗於比曾箭乃曾與等奈流麻塗奈氣吉都流香母と
も見えたり。みねソヨク。或ハザワクと鳴り動く音を謂
也。古今集。稻葉そよぎて秋風の吹とある也。サワツイ
テの意なり。

そら コ、チ

四卷 廿一 丁 下。思空安莫國嘆虚不安物乎。云くとあるハ。思

フコ、チ、嘆クコ、チと云意なり。八卷三十一丁。伊奈牟之イナハシ
呂河向立意空不安久尔ロカニキタチオモフソラヤスカラナクニハカッソラヤスカラナクニ嘆空不安久尔ハカッソラヤスカラナクニ十七セ六丁。奈氣ナゲ
久蘇良夜須家奈久尔クソラヤスカラナクニ於母布蘇良久流之オモフソラヤスカラナクニ伎母能乎シキモノヲ十八
三十ニ。故敷流曾良夜須久之安良祿婆コフルソラヤスカラナクニ十九十六丁。嘆蘇ナゲソ
良夜須家久奈久尔ラヤスカラナクニ念蘇良苦伎毛能乎オモソラヤスカラナクニなどあるみ乳同
ト竹採物語ト。これを御門御覽トていゝ。還り賜をむ
空もなくたをさる。とある空ソラも同ト。榮花物語ト。大藏卿
正光朝臣たひ奉アて。あへらせ賜ふをとあどいみトく
悲ト。あへらせ賜ふ道の空もなト云く。出させ給ふ道の
空もなくいみトうたをさるべト。かげろふの日記ト。ち

とゝぎほのたとなひも。やをき空なくたもふべめ
れ。落窪物語ト。はやり御てうづまをれとの給へむ。とち
てありく空もあし。源氏物語赤石ト。家をはなれさうひ
をさりて。明くれやをき空なくなげき給ふト。かくうれ
しき目をさへ見給ふ。今昔物語ト。敏行更ト。歩む空なく
してゆくト。云く。僧手など洗て經讀居ト。其音極て貴
し。然まども心の内ト。更ト。讀空ト。あしなどあるも。皆同
意なり。

